官版

語彙

巻五

ホ 2
4706
5

門ホ2
4706
5

ホ42
5

語彙巻五

阿部五

あら

あらんと覺ゆる聲ゝてあらあらこゝふ走入てあらあらまく 明恵上人傳記 あらあはれとのひそけり 今昔 本の妻忽ちかそぞふさ〳〵あく

あら

あらが糸、あらたま、あらどのあらかう

あら

あら。あらぬう

あら。いうけ

嘆辭あり 字拾 あらかう〳〵されをたゝけたまへ 著 天井のうへふあらびさ〳〵てや

和のうらうてあらう〳〵〳〵粗あるをいふあらたま、あらかを、あらめ、あらし糸、新あるをいふあらたま、あらどのあらかう

米皮あどの粗あるものをいふ

類名 糠又 糠 字鏡集 麤

魚名、形大ロ魚ふ似たり黄黒色すゝ斑文あり小き者ハ一二尺大きなるハ三尺許ふ

至る者あり其味淡し〇鰿魚
料理物語 鰤 汁ものによし

あら

あら 俗

あらゝ

らるふやうゆーて語り居り 宇治拾九 聲顔を
かくてあらゝゝとひそふゝやろぶ

あらゝ

略々あて サット 又 アラッポク の意あり 夫 卅六
浪の上にものあらゝゝあらせそぐらだく
心のわづともそべき
類名 略又粗 アラく

あらゝゝき 沁 汕 汕

ろゝゝもの思ひあらゝぬやうゝあ
でもありぬべき事あれ 源負 夜中も過ぬけんうゝ風のやゝあらゝゝう
吹たるいまゝて松のひゞき木深く聞えて 長明無名抄上 覺盛法師ダ曰く
歌はあらゝゝとめるおりぬやうなる一のよがこ

あらゝゝき 沁 汕 汕

荒き狀をいふあり 宇 園韻 あそろゝゝ
あらゝゝもの心もたべくることを女のあるこ
ろゝもありぬべき事あれ 源負 夜中も過ぬけんうゝ風のやゝあらゝゝう
吹たるいまゝて松のひゞき木深く聞えて 長明無名抄上 覺盛法師ダ曰く
歌はあらゝゝとめるおりぬやうなる一のよがこ

あらゝゝき 沁 汕 汕

御所のさやうのど扱敷をさけ葦の御簾をうけ布のもあう
あらゝゝゝく御調度どうゝおろそ小
ソマツナルサマをいふあり 徒然草 諒闇の年

あらいそ

荒き磯あり 八雲集 あら磯の外面く浪の
わらゝ心もあら思ゝこひいあぬゝとも

あらいそのは

又三 今ぞ荒磯岩のたゝ波
かゝゐて袖めらゝゝく

あらいそのを

荒き磯の岩あり 新六 浪のうへ荒磯岩の
これをうゝらだけて人を戀ひぬきそあり
荒き磯の浪あり 新葉冬 空ふのを聲ハきを
えて浦風のおろのそるをふれろ千鳥うゝ

あらいそを

神事ふあづる人々へうたよりものを
まそるをいふ致齋を眞忌といふもむくて

あらう

散齋 サンと荒忌 クワウきといへり 神祇令
二日園大暦 明法勘文云散齋
たらふべゝやいのろゝゝきあ
まいをきよそもそもとも

あらう

散齋一月致齋三日 大學式 散齋三日致齋
二日園大暦 明法勘文云散齋 荒忌致齋 眞忌 和泉式部集上 契りゝを

あらう

あゝき鷗鵡をいふ 新六三 おきろゝゝを浪の
間もあゝあらうとやろせどつをきのろう

ざゝらん 謡曲鵜飼 あゝもうさもうさ
この河浪小さゞゝと放せば

あらう 俗 物の有無ふいふ言ゆて
あゝらんの音便あり

あらゝ〳〵 暴き牛あり 信明集 あゝう〳〵のゐ[ヒ]の浦の
あゝ〳〵きふとうて見つゝをびたゞ〳〵れふけり

あらうま 馬のかんよく〳〵て口さえるとつゝきをとらふ
羽尾記 強弓をひきあゝ馬をよく〳〵のり

あらうちのさうじ 音 清涼殿の弘廂の北ふある布障子あり
面障子宇治、綱代、墨繪也 枕二 清涼殿のうしとらのまその北のへだてそある
御さうじゆゐあゝうちのかたうらにある物どものおそろ〳〵けある
禁秘抄 北有荒海障子南方手長足長北

あらがき 麁略ゐ造うたる籬をとらふ 催馬樂 加波
久知乃世支乃安良可支也

あらがきの 枕詞 方十二 荒垣之よそゆやこゞくむ〇よそと
あゝ〳〵ときこゆ透間あゝとありて らもむて物へさろる垣を冠らせ〳〵のゝ
あらゝじめ

マヘビロ ふいふ意ゆてか稱てようゐふことゝ
ふいふ 仁徳紀 故預選明徳 方三 出て行道

あらかせぎ 俗 骨の折るゝ業そ〳〵て世を渡るをとらふ
あらかたヒドイの意あり

あらかた 俗。あゝま〳〵 オホカタタイガイの
意あり

あらかね 枕詞 ぢるものある故ゐ冠らせたり
らだ〳〵ろるあり 賀茂真淵ハ金ハ土ゐ生
りゐゆでかゝもろるあり 古今集 古今序 あら
本居宣長の説ゐ殿舎掘のうりいゐ人殿舎を御あらうとひまふ其御を

あらかね 新万 あらかね[ね]の土の下ゐて
かゐのつちふ〳〵て八〇舊説ゐ金ハ土ゐ生
たりとのへりこれよるゐ鑛の生ある土とひ
淵ハ金ハ土の下ゐ年經て有るのるれバ土の下と
略きて用ゐたるふ〳〵とのへり

あらかねの 枕詞

あらかね 本和 鐵 和名阿良加禰
炒豆腐の類あり 豆腐百珍 水と搾りくび
あぶ〳〵を用ゐ酒ふると醤油ゐて炒り
つけまり山椒うち
こもあり

省きてあらゝとのゝしりたまひ〳〵ありき 古語拾遺ホ造殿齋部所居謂之斎香又檀原大宮造の處ホ古語正殿謂之斎香とある是ありきて古の殿舎ハ柱を地ホ堀り入て建たり〳〵ゝ地いあらゝの根あるまで〳〵あり古語ホ底津石根ホ宮柱布刀斯理と云を思ふべし〳〵とのべり〇今按ホ宣長の説いよ〳〵げあもと此あらかゝ殆のつちとのべる枕詞奈良のこゝろまでいこゝろねがおもう古義ホ過たり真淵の土の下ホそかくるとのべるも少〳〵泥めるやうや先奮説の穏當あるをよう〳〵とゝそべ〳〵

あらがひ　あらそふこと
體言〇爭

あらがふ　ハ ヒ フ ヘ
あらそふとおなじ
〇爭

あらがはさる　セ スル スレ
他をして アラソハセル を
いふなり

あらがはむる　メ ム ムル ムレ
他ホ アラソハレル を
同上
いふなり

あらがはる　レ ル ル ルレ
他ホ アラソハレル を
いふなり

あらがへる　ラ リ ル レ
我がおのづから アラソハレル を
いふなり

爭ひてあるを
いふなり

宇拾八 此罪をゝてのごあらがふかた候そぬなりと申せは 枕五 人のさ〳〵むうひてあらがはもべ〳〵ゝるくのひのそれる 後撰 恋五 消息かよはしけるこどもさまざまあはざりける男をこれうもまあひみけりとのひさうらぐをあらゝそぐありとうらをつゝ

あらかべ 俗
上塗をせぬ壁を
いふなり

あらがを
あきろかをを後世ホかゝのひ現神の字をかゝよめるゝ誤なり義ハあきろかゝの下ホ注せる 夫木 あら神の顯もを出〳〵昔より神をゝ君とあふぎそめてき

あらき
人の死たるを未だ葬せざりホあらざるく叔め置く所をいふ荒城の義なり城ゝゝ一構の内を云詞なり 記中 坐殯宮ニ 齊明紀 皇孫建王八歳薨今城谷上起殯而收万ニ 天皇大殯之時 又 日並知皇子尊殯宮之時 又三 左大臣長屋王賜死之後倉橋女王歌あらきゝの大荒城の時ホあ〳〵ゝ神ど雲がゝ〳〵うまもと

あらき 俗
木の皮を去らざるものをいふ〇撰

あらき　クロキ　わけくそけ〳〵きをといふ　記上　更起荒心迫来　万六　荒浪かせおそせらさづ〳〵そやまひも〳〵
イ
あ〳〵せは　狹一　あらきえびすもろきぬべきものあり
あらき　クロキ　木草の生ひ茂れる又人もかよふそぬところをいふ　万四　周防なる岩國山をこえん日ハ又主　のそゞ路の
わむけよ〳〵せよ荒きその道
安良伎まもねふやどりもる君　こゝやらうらざるものをいふ又製造の　ソマツ　なるをもいふ　類名　麁ソラ
あらき　クロキ　邊齋の名より出て粗暴なる人をいふ　狹二　あらきえびすもろきぬべきものあり
イ　ソ　濁
あらきえびす　つよ〳〵えげき風をのふ　万十九　荒風なそふ
あらきかぜ　あらきかぜらせぎ〳〵えげのれ〳〵ようこのぎぐ人ぞ〳〵づ〳〵
らふべふ　源桐壺　ろるるき　又野分　下露はあびふす〳〵ふ女郎花あ〳〵き風ゆふ〳〵をれざ〳〵ふ〳〵
あらきこころ　たけ〳〵あら〳〵〳〵き心あり　記上　更起荒心　迫来　成務紀　黎元蠢爾不悛野心
あらきのそや　天皇崩御及皇子皇女の薨せ〳〵時葬送の前ふ假ふ尊體を收め置く宮を云〇殯宮

記中　爾驚懼而坐殯宮　允恭紀　殯宮大夫王田宿禰　敏達紀　天皇崩起殯宮於廣瀬〇日本紀　の殯宮を真淵ハ仲哀紀　ふ死火殯斂此云褒那之阿餓利とある訓注ふ擬てあぐりのそやと訓たまで宜長ハ萬葉集　ふ大皇之命恐大荒城乃時爾波不有跡雲隱坐とある大荒城ハ御喪の時を云て同集中ふ其尊殯宮之時とあるふ同じ訓べ〳〵とのべ〳〵上文あらきの條合せ見るべ〳〵

あらきのゆそ　新ら〳〵き弓をいふ　新六五　つるるもねあ〳〵きの弓のそり高きそのうろ〳〵ふ引く人ぞるき
あらきはり　田をあ〳〵たふ墾ることゝあり　類名　苗又載ハリ　字鏡集　載アラキ
あらきみづ　洪水をいふ　祝詞式龍田風神祭　惡風　荒水ふ相　不成傷波
あらぐ〳〵　俗　髮を搔る歯の粗き　搔をいふ
あらくま　たけき熊をいふ　万十二　荒熊のまむとふ山のあらそ母山せめてとふともあが名ハのら〳〵ず〳〵
あらくまのき　沢潟　荒き狀をいふ　後拾雜四　人〳〵そあらくまのかとそせそべりけまぶ　金葉雜上　いろ

あらくる ケクルクル 浪風の アレル をいふ 土佐 今日海あらけ磯も雲うり浪の花さけり

あらくる ケクルクル ハナレバナレニナル 又 チリヂリニナル を云 神代紀上 散失矣 太平十八 あぐるつぐるのこと名大日の散歸 アラケ

あらくる レルルルル こゆるぐるぐるぐるとあるく 文選 颯 アラク

あらくれもの 俗 あらくれたる粗暴なるものをいふ

あらけなき クルシキ 會の夜きぬうづきを御けきうまつれと 保元 月卿雲客一人も候そたぐまれなりけり 盛衰 あらけなきものゝ手おかうと

あらこ 目のあらき籠をいふ 神代紀下 因取其竹作大目麁籠 内火出見尊於籠中 竹

あらこらくがん 俗 糯麁の粗あるを沙糖飴を和し種々の形を造りたるものなり

あらし 風をいふ 和 嵐山下出風也 阿良之 古今 秋下 吹くるかぜの草木のあらくなれば

あらじ 不有 ゆえ サウデアルマイ の意あり 月清集上 秋そとそよまそけ〳〵吹あらじ

あらしがね 山せうのあらびと

あらしのこと サワギ をいふ 散木中 そこぎまもるあらし〳〵ぎぬれもらきまてむうへふき

俳優の勇者ゆ扮者をいふ

あたらし〳〵きこともをいふ 辨内侍日記 あらざるものゝやうなるものをぬのまそそ

あらゝこ 俗 工匠の用ゐる荒けづりをもいふかんな
あらゝごゝろの義あり

あらゝこ 俗 農家のどゆて下賤のものをいふ
又軍卒をもいふ

あらゝごと 俗 骨の折るゝ荒き業をいふ

あらゝかヒドイの意あり

あらゝのあと 嵐の吹過たるあとをいふ 新千冬 あらゝ紀の外山をうけて雲をもらす嵐のあともふく時雨つゝ

あらゝのうへ あらゝの上ゆく嵐よりも上ある空をいふ
空はそこそ嵐のうへふ月ぜゐりゆゝ 新後秋 嶺たる紀松のひゞきふきゝとりつゝ

あらゝのおゝ 遠き方を奥といふのひゞのせるをいふ 風雅雑中
あゝびたる松のおもてのしゞまゆゝふおゝゝふ鐘ひゞゝゐり

あらゝのかぜ あらゝき風をいふ 後撰雑四 人心あしの風のさもけもぶるのめもこゝろぜ枝ぞあらそふる
あらゝのふるぬさ紀ゆてふるぬもうへをいふ 後撰奉 あゝびきの山のひゞいき散ふけり

あらゝのさと ひゞきもり吹る山嵐のさまをいふ 新後冬 散もろる後さへあとを定めぬかあゝ

あらゝのつゝ あゝの物をさをひらゝるを人のものをつれふるふいひるのせるをいふ嵐のつゝとのさゝとゝ遠けれどもそこる。

あらゝめ あゝたゝるる標あり志めいものゝかゝひをいふ 拾玉二 山ざとの外面の小田のひとせ

あらゝやよたい 俗 新ゝ家を設けたる人をいふなり

あらゝを。あらゝきをゝとの義ゝ生ゝをゝとゝいふゝ
あるゞ〳〵 万十七 ありきゝとのまけのゆゆ〳〵 云云

安良志予須良わるびき
ふせ〳〵ん

あらまし サシスセ

殿門荒廃の事毛々万タメられる千鳥のうき〳〵佐保路をぞ安良之や〳〵
てもむろるよ〳〵をるを源旨宮この院あ〳〵きぞわ〳〵うのおかちるど人うげ
かるろへうとおが〳〵の給もせそ詞花雑板間より月のるうをもろろ
うの宿いあ〳〵そもむへうけり土御門院御集蘆の葉ふつるぐうき
まも氷つ〳〵まあ〳〵れる
冬の鳥 〳〵

あらまし

かそ〳〵うおぢろるうとこそせ
のへ〳〵ぎうつるとこのひ待るとを申とおりぬ

あらまきかへす サシスセ

てもそそそやまめ
人のこころを

あらまぼろし

すへ〳〵ものを又四かへ〳〵ぢうり戀つ不有者高山の岩根しまきそろあ
るものぞ〳〵そ伊中々ふ人とあ〳〵ぼろはこふぞうるぐうけるエの緒だうり

不有おそあ〳〵とのふ意サウデナイの義あり
類名否又非アラ扰二うおとぞうりふさぞ

田園うぐを荒もをいふ又家うどつ〳〵ろい
ぎ〳〵て破もゆ〳〵ふまるまそるをる云續紀十七

あらまし

かそ〳〵うおぢろるうとこそせ給ふあ〳〵ぎ車の
のへ〳〵ぎうつるとこのひ待るとを申とおりぬ

六帖三あ〳〵き田をまろろふもそきかへすををいふあり

あらんようの意ふのへり万二かへ〳〵ぢうり戀つ不有者高山の岩根しまきそろあ
るものぞ〳〵そ伊中々ふ人とあ〳〵ぼろはこふぞうるぐうけるエの緒だうり

堅き炭をいふ類名炭アラズミ靈異中炭アラズミ
内匠式炭一石二斗和炭二石
炭を入る籠あり字笠平籠也炭籠也阿良須弥乃古
類名笠アラガス

あらそふ ハヒフヘホ

互ふ物事をもとめあふり○爭

あらそはる レルルルレレ

他をして アラソハセルをいふり

あらそはるる レルルルレレ

他ふ アラソハレルをいふり

あらそふ物 ハヒフヘホ

我がものづ〳〵物事の
爭ひてあるをいふり

あらそふる ラリルルレ

爭ひてあるを
いふあり

船来の花草高二尺許莖頭ふ美ある紫色の
花攅簇を花後長角を結ぶ○紫羅欄花

あらそひの體言

○爭

同上

記中 阿良 薫波愛 源帚木 中将 あ〜そふ 又繪合 竹取の翁 ふうじ〜 類名 妬 アラ

薄紅 ふ深 れる麻布 あり 天智紀 以錦 縋深 布五十八端賜播磨寺 万十二 紅の薄深 衣

あ〜そせ給ふ 紫式部日記上 ぬひ〜もの松ぐえのようひを

あらそめ

あさ〜ふあひそ〜人ふ戀 物思ひて妹ふ逢ん物 弾正式 元紵布衣者雖深退紅自非輕細二不在制限

あらそ〜〜もとりふ〇新 字鏡集 沿 アラシ

あらそ

谷い山さへ それもけが水の色 類名 新 アラタ 大江千里句題和歌 雲もう〜

やまとことばぎ君が代ふあ〜 色こそあ〜あらけれ 拾五五 敷〜ふや

あらた

荒田ゆて耕せぬ田をりふ 拾愚上 思ふこそ

けふの春雨 新六三 山本のあ〜 かんもぐ〜もさびぐ〜けをあ〜 たの面の

手をたもとかへも〜もひろひやらせぬ

あらた

あらたま

歌曲の名あり 風俗譜 荒田 安良 衣仁

抄不留止見久佐乃波奈

あらたし

新々ゆて改ることあり 万廿 とし月ハ安

良多安良多ふあひそもでありふ君ハ

おきたくぬるも〇良多今本多良ふ

作る古本小擬て訂せ

あらたふ 俗

神又佛なとの威力の

顯然たるをいふ

あらたし

あれたるとと同ト 万六 たるをふの盛も

あらたま 安良多之家牟と 字鏡集 沿 アラシ

風雨浪なとの暴くある狀をいふあり

あらたし 夫十六 神無月夕日のかげふなりふけり

あらくるる

あらくるるをいふ又腹だつをもいふあり

あらくれ 源帚木 鬼神もあらだつまでき御けそひ

あらだつ

あれバ 又紅葉賀 あらだち〜波ふこころおさえ

よせけむ磯をいそぐうちそぬ

あらだつる テツル

あらたふと

あらたへ

人の心をアラダテル あり 源槙柱 このころあらだてる

いそぐき事ので来るんとあり〜そうじめて

荒田を墾るゆて墾るゆ開發せるをいふ

あらた 類名 沿田ハアルタ

語意ふ次ふあり 祝詞式 祈年祭 御服者明妙

照妙和妙荒妙ふ称辞竟奉ゆ 大嘗祭式 阿

波國忌部所織
麁妙服 神語所謂阿良多倍是也

あらたへの 枕詞

○あらたへの麁栲ゆて麻ふくれ布ふもの色織目のあらくそろとそいふ藤とつづけたるは藤布の意ゆてあらめのあらくさゞ故あり

あらたへのそで

麁布の御服をいふ 臨時祭式 紙五十張
麁服八具料庸布四段

あらたま

玉のさゞやかなるをいふ

和璞 和名抄 良太萬 玉未理也

あらたまの 枕詞

又十四 阿良多麻能伎倍のそや〜ひと夜もおちず 又十五 安良多麻能月日もきへぬ 又 安良多麻乃たつの月と

記中 阿良多麻能登斯賀岐 布禮婆阿良多麻能都紀波岐閇由久 万十二 璞之十戸我竹垣

又十四 荒玉乃月ふへぬると 又十三 荒田麻能

とふ恵見集 あら玉の春とも年ともいふ意後世新をあたら〜とのみつゞけたるは誤あり古言は必ず改字をあらたむと訓と同義あり間ゆて程と云ふ同じ〜年月日夜のうつりゆく意の詞あり

万二 荒妙乃ころもの袖ハ 又五 荒妙能ぬのきぬをだに 又十五 安良多倍乃藤原ゞうへ

の都紀波岐閇由久 万十二 璞之十戸我竹垣

月日夜のひと日ひと月と漸々ふ来経徃をいふ

藤布ふもれ布ふもの色織目のあらくそろとそいふ

ますてありめのあらくさゞ故あり

年月又ハ日夜ふもつゞけ又ハ春ともつゞけたるあり

あらたまる ラリルレ

あたらしくなるをいふ あらたまりて○改

あらたまれる ラリルレ

古今春上 千鳥さへづる春いたるのごとふおもほゆれどもこれぞそらゆく

狭四 年もへぬるをゞ大将殿の御かたるゝ女君の御年をうつるのどとそ

おもほゆる花やうぐひすなど

あらたまる メミムルル 自ら物を改むるをいふ ○改

舒明紀 自今以後勿憚改 續古今序 ことふ

ようて古今のあとをあらため四人のとゞろゞきをあらためて諸聲ともやうたふふ

ふる卯月のころめあらたまれる體言改革をいふ 新六 ちゝや

あらたまれる代あり 万二 ふるあんくるあやゝき

轉じて吟味檢査をいふ 亀も新代とのゞの河ふ

あらたまれよ

門改人別改の類あり

あらため 俗

あらだま（俗）　陸奥津軽の産闇笠ヲ織る草

あらち（荒）を　やのさきヲ立（タ）鹿もの と我ごとヲ物ヲ思フ［八磨集］あらちをのかる

あらつくり　あ〳〵つくることあと［シタゴシラヘ］［アラゴナシ］の意あり［今昔廿三］箭篠の荒造り〳〵なるは

あらづやき（俗）　人の性のあ〳〵きを

あらづやき（俗）　いふあり

あらそ　こゆやうの〳〵ぬを

あらそ　軍ヲ疲（カ）もたるらん休（ヤ）ミ給へ景廉荒手［七十一番職人歌合］られごとふひとり［新六三］あそろ〳〵やつはの枕のあ〳〵つくりかどある人ハ友とたのみて

あらそ　いふ〇粗　出張〳〵そのやうだわるうそぶる兵士をいふ［盛衰ヲ］加藤次申けるハ殿原ハ宵より

あらそと　質粗（ヤ）糙（ヤ）たる砥（ト）あり［和礒］一名磆［和名抄良賀］麁礪

あらごと　死者をふさ〳〵むる所をいふ［万］二荒床ヲ　こゝろぶを君がゝんぶきそもつけむ

あらごと（俗）　疊の新（ア）ら〳〵き心をいふ

あらゐ（俗）　新ら〳〵き縄をいふ

あらゐと　あ〳〵き波を云記上［其荒浪自伏］赤染衛門集上あ〳〵波のうちよ〳〵ぬまゝ住の江のきし〳〵の

あらゐとのげいふ　しそそん

あらぬ　ぬもれとおりめられつゝ［新古哀傷］後撰夏［郭公］ほとゝぎす人の跡をたれぞとてきてそ鳴くらん

里あら成ぬけるうゑ［新六三］いろふせんうちの〳〵生年をへてあ〳〵ぬつらりぬきを

うら〳〵世と［拾玉二］のちの世ヲ染る心をよそゆてあ〳〵ぬ色ゆや思ひるもちらん

［後拾遺］ちる花のうたゝねもよ〳〵やよしの川あ〳〵ぬ色香ヲさけける山吹

あらぬう　〇あらゐ

あらぬうた　類名粳又糧又稭（アラ）［サウデナイ］方角をいふ［續後拾意三］陸奥のおだちの真弓末つひふあ〳〵ぬ方ふらひ〳〵心うき

あらぬさま　［サウデナイ］アリサマをいふ［拾玉二］人ぞれを逢ぬさきの面影をあ〳〵ぬさまゆや思ひつゝくらん

あらぬさぞ
あらぬもの
あらねよし（枕詞）
よしゑやの類ゆてよゝ呼のごとく荒すて根とゝ海中より望たるを鮮ゝ助語あり意ハ荒ハ荒磯荒海あとの荒ところをいふ倭島根あとの根あり對馬ハ海中ふそなれる國あるゆゑかくつゞけたるなり

あらの
あらのら
荒たる野あり
和 曠野 加良

あらへ
ゆふかくの夏虫のおゝふゆもゆしたゝりぞ 類名 倭又野又淀祖ハアラ
同上らゝ添たる鮮万六 荒野等ゝ里ハあれどゝも大君のおきてもとゝきゝ都とゝゆゑおゝらゝしてあるとゝふなり 神代紀下 露ニ其胸乳ヲ 欽明紀 曉然 後拾意四 人の身を戀

あらはが（俗）○あらはふ
搗の一種、下野日光山の産ゝして其葉七尖面深緑背白毛あり枝上の穗とゝして花を開く

あらはるゝ サ シ ス セ
あゝはゝとおゝの〳〵○顯 愚管抄三 ひゝとあらはかされたるゆて侍るなり 今昔廿 此う世の人皆貴びゝり 東北院職人歌合 うふきかたぎこゝろひの月ゆあゝはらゝやも

あらはるゝや（俗）
木名おそやるぎの
下ゆ注ゝ

あらはるゝ サ シ ス セ
かゝらまくおもふとゝのふ○顯 記上 後田毘古大神者專所顯申之汝送奉 源若紫 もて
はるれたり〳〵御けゝきのつゆもうちふゆあゝ〳〵こゝろふあゝそゝて侍らゝ續古卓 心筆の跡ゆあゝ〳〵
ゆもそ
あゝはさゝとのふこゝろ〳〵 又古の事とも

あらばたゝき（俗）
骨の折〳〵業おるとゝふ
ヒドイメタラキの意あり

あらはふごと
治神事云於是大己貴神報曰吾所治顯露事者皇孫當治 汝則可以
幽界ゆ對〳〵ゝ現世のことゝふ 神代紀下 夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之

あらはひ○せんたく
あゝひの延言スヽギセンタク あり 宇藏開下 あゝはひおゝろいゝつゞくや 大和 戒仙と云人

法師ゐのりて山ゐまもむ間ゐ
親のもとゐきぬるごとあらひ
あらばへ俗
あらはるゝ レルルルレ
いまてるきぬべらあり 詞花雑上 住吉の浪ゐひかまる
松よりも神のあるー ぞまくはれゐける
あらひがは
あらひぎぬ
あらひぎぬ 枕詞
枕詞とーたるまり上よりの
とゐふ意を地名のとりひゐひよけて
とゐふ意あるふよりて替
とゐふやまゐ鳥貝ゐひらだー たるまり
妹ゞ手を取石迹まゐた
あらひごろも
馬をあらふときかくるしつきをとゐふ
舞の雙紙 和用盛 こゐゐめゐらひーそぞあるさゐ

物称 畿内及中國の船人のことぞゐ
五月の南風をまゝはへことゐふ
物の自らまゝろるをとゐふまり 古今 戀三 風
ふけが浪うきーの松ゐまや稱ゐまゝ
淡紅ゐ染たる革をとゐふ
左右馬寮式 洗革 數隨大小請大藏一
洗ひ衣あり 万十三 浣衣 とりかへぐゐのかろよ
どのよゐまんこころおもひ給つ
万十三 浣衣 とり久河の〇衣を洗て取るふる

けるふらおうんひゐまるあらざれば、はづゑ、はらがけ、ひれらぎろてゐらひ
ろつをはめさせ、ひきよせゐりとうちのうゐまゐ
あらひごひ俗
あらひざら
あらひしほ
あらひそゝぐ 加利列
つゝさゐぶり早川ゐ
洗濯
あらひとぶそ
ゐのまゐだるゐまゐらひとぶそのゐ
思ひひつゐやゐきを名のたつゐうあり
あらひのり俗
あらひはり俗

鮮鯉魚の輔ゐ冷水を洗き洗ひ縮め
たるもの鱸牛尾魚等同ー
物を洗ふ盤ゐり 四時祭式 濯盤短女
杯各六口 主計式上 洗盤三口
醬の下等ゐる者をとりふ
大膳式下 鼈醬九合二勺五撮
水ゆてもぐき清むるをとりふ 万十六 つゝ名の
ゐもの名たゞゝをらひうひ持来と石もちて

此世ゐあうつをそ人の體ゐる神とりふ
義ゐり 雄略紀 長人對曰現人之神 拾遺 神樂
出雲の産
紫菜の類
故衣を洗ひ濯き張て
清らゝゐまるゐり

あらひはりや（俗）故衣を洗濯ㇾ清むる工ㇾ

あらひそもそ サシスセ 雨ゆあらひそかこうそもそㇾ 夫芙 呉竹のよのやの雨ゆあらひおㇾそ朝日おさうこそ布引の瀧

あらひよのね。せんまい 白米を水ゆて清く洗ㇾるをいふ神供ゆ用ゆるものㇾ

あらふ ハヒフヘ キヨメル又きらはをいふㇾ

あらはする セスルスレ 他をㇾこと アラハセルを いふㇾ

あらはるゝ メムルムレ 同上

あらはる レルルルレ 他ゆ アラハルレ をいふㇾ

あらはるゝ レルルルレ 我があのゝこゝ アラハレルを いふㇾ

あらゝぐる ラリルレ 洗ひてあるをいふㇾ

飫宜集 綱代木ゆかけつゝあらゝぐる唐錦日をへてよそほる紅葉ㇾすりけり

拾遺物名 莖ㇾ葉ㇾこゝみどろゝぐるふせりかあゝふねのこゝあゝ白くこゝあゝむ

拾遺 頼政集 春雨ゆ柳のかこをㇾ あゝはせそけづり流ㇾそゝ風ゆそもありけるㇾ

あらふ（俗） 上の語を轉じて物事のかゝれたるを吟味ㇾあゝあらゝぐたづねそもとこほのくりㇾ

あらふる 備後（俗） 魚名ㇾふるの下ゆ注もㇾ

あらぶる ビブルブレ 國の ヒラケナイ の意ㇾり ○荒 神代紀上 夫葦原中國本自荒芒

あらぶる ビブルブレ 神の荒給ふをいふ又物の アレル そもいふ記中 於此國道速振荒振國神等之多在

拾遺 哀 さそゝくるもあらぶるㇾ あごゝのそゝくありけり 文選古訓 獗狂

あらぶる ビブルブレ 常ゆおこづもゝのゝ ブサクミナル をいふㇾり 万二 あゆまのこゝ池のうへゝるそあちㇾ鳥

旅備刻行もこと ゆきもせこと

あらぶるらゝ 振姉ゆこひつゝそそる 心のあらびそうとくゝる女をいふ 万十二 たくひものまゝそゝるそのよりもゝへぞ荒（アラ）

あらぶるかみ

ゆるけくふるまひ人をまどはすもの

あらぶるきみ

あらぶるあや

あらぶるひと

あらぶね

あらぶねとり 俗

あらまき

あらまきき

あらまきの

おほきなる多く奉りたりけるを

疎暴なる神あり 祝詞式大祓 荒振神等 神名帳波 順集 ねもころごろもさうぜもあくふる神だ

うたくうまる人をいふ 万四 篤紫舩まだなる こざれがあらくしめ荒振公をこそるかあくき

あくき潮をいふ 散木中 こそごだくまふ磯をうちさしあらぶるあやをそごめういふ

強暴の人をいふ 崇神紀 唯海外荒俗驚動未止 又 縦荒俗舉兵以討不服

枯骨をいふ 字鏡集 骼アラ

麁骨 折ゆる トドシロザ あり

田づくせぎをいふ 字 統又稿阿良支

蘆又竹をもて魚肉を外よりつつむあり 和 苞苴裹魚肉也阿良 宇拾二 鯛のあら

あらまき 行末ノロアテ ゆそゆくかくあらんと思ふ事をうれて押量る意俗ふ大概の意ふいふハ轉ド

行末をかねて思ひ量るあらまくようの轉ドて大略の意ふいふり タイガイ オホヨソ アラカタ あり

荒き狀ゆてあるをいふあり 源若紫 あくしくきこえさせべきあくねびうちるはき

あらまき 又東屋 あらまき山道ゆ

つゆたり たはやすくおるひたくでるん

あらまきごと

かねて押そうと思ふことあり 榮 さうこう たづ

ここだてゆうつる 散木下 昔せくあらまきごとをのそぎ覺くたるもしく

あらまきの 續古 雜中 心をがけそ心こそそのぐさむまあらまきごとのこをまだたうふ

あらまきも 俗

魚名、うこやもと

の一種

あらまさ　サシスセ

あらまさる　レルルルル

他ふ カネテハカラレル を
いふなり

あらまさる　レルルルル

我がおのづから カネテハカラレル を
いふなり

拾遺愚草中 こうさ山ふもとぞうと尋ねてる あゝまゝ思ふ道のそるけさ
拾遺古徳傳 各朝呼の先言を懺悔し信順の後會をそあゝまゝける
徒然草 行末ひさ〳〵あゝまゝも心ふうけるあだ〳〵 大平十二いうるの
山のあゝまゝも身をかゝさそやとこそろふまゝまされそそかたうける

あらまのせバ

まゝ 又十五 ねぞたまのよ渡る月ふ安良麻世婆
家ある妹ふ逢とこふゝを

あらまかりき　シクシシキ

左様ニアリタイモノト思フ状をいふなり 源桐壺 おこ
らまもりてかゝづらるゝあゝまかりき御
あゝまかりとうを給ふ御さまかれちどもあゝまさう
こそあゝまかり
ちべき

盛衰九 ひとへふ後の世の苦をやめうまゝ方便を

あらそ 俗

新ふ鍛たる刀劍をいふ

あらそかけ

次條ふ

あらそきみ

注まも

人の中をさうる神をいふ 狭一 物のさまたげ
の一奉るあめりおろきさうとふものそか
孟津抄 人の中をさうる神をぞあらそかけといふ荒神ぞう

あらそぞ

廣き墅をいふ
字鏡集 隍ヲウ

あらそたま

神の御靈の徳用の荒く進むを云和魂ふ
對へたる稱なり 記中 即以墨江大神之
荒御魂 為國守神而祭鎮還渡也 神功紀 和魂服王身而守壽命荒魂為
先鋒而導師船云云荒魂此云阿邏瀰多摩 出雲風土記 大神之和魂者静
而荒魂者皆
悉依給

あらむーや むーや 音

粗暴なる武人を云 宇拾十 かつよく心たけ
むくつけきあゝむーやのものゝらぞきて
荒の粗あるをいふ 七十番職人歌合 うちたへ
糸あやぞらの荒荒いのねりくぺ紀月の影うゐ

あらめ。ゃまゐ〜
粗メ縦皺あり食用とす
四時祭式滑海藻二百卄斤和滑藻阿良女俗用荒布
海底の石ゐ附き生ぜる海藻ゆ〜して其葉扁く長く一根より叢生せ色黒く質

あらもと。こめさ記
ここさ記

あらもの俗
雑ゐつくりたる器物をいふ

あらもの俗
あら〜くしたものゆそたゝくべきらんぢおろそう或ハ竹帚おどの器の類をおゝくあべてりふ粗く鏤を用おるを云七十番職人歌合恨めしや人の心のあゝやもうひうえめゐだゆのぞれぬ哉

あらやもり
荒き山あり方三

あらやま。
せぜまうえのたろ荒山中ゐ海をるもそうも

あらやまを
新らきやまを云七十番職人歌合玉椿もそねのゆらる荒屋のおゝくへそる人ぞ戀しき

あらゆる
所有の義すて アルカギリ又 アルタケおなどりふ意なり記上於葦原中國所有宇都志伎

青人草之落苦瀬而患憊時

あらよ
六月祓の時御贖の爲ゐ荒世和世とて二種の御衣を奉るあり四時祭式晦日ト部各著明衣二人執荒世二人執和世云云中臣率ト部執荒世者就階下置於席上云云其荒服者賜ト部和服者賜宮主本朝世記云々服 音伏 今夜神祇官奉荒世和世御贖其儀如常

あらゝ
あゝ麻 荒ゝ麻 荒ゝ麻 荒

○やまびる　深山ふかき所より早春舊根より苗を生ず葉紫蓼の如く縦
○おふふひとへ　遊ぶ〳〵莖を抽出ること八九寸韮花の如くして大ふり
六瓣淡紫又白花のものあり韮類の如き臭氣ふり　名恭紀　旦暮乞丐毋
其蘭一莖爲大膳式上　山蘭一合精菜　又干蘭本和蘭掌草　和名抄岐

あらゝぎまひ　舞の名ふり　續古事談五　一條院の御時相撲の挼手の日あらゝぎ舞といふ舞御覧ど

けりこともいと藥師寺風俗こそ女もとゞれあそび始め人のたけのわどあそやう〳〵高くあがりて二夫ふ及びけり従ふ女ありけりその後ふそと程ふ〳〵かゝもあらゝぎまひの舞ふ〳〵

あられ

あられ　俗　雨粒の氷りなどりて降るをいふ　和　霓　安良禮

あられ　俗　餈を食ふ物ふり

あられ　俗　細糠を炒焦し湯ふ點じて飲む物ふり

あられい〳〵　美濃　俗　糯麹ふ砂糖を和し漉して方ふ切たるもの又砂糖を小方ふ製したるをもいふ

石名、はうけ〳〵やくの下ふ注もを

あられうろ　枕詞　万一霰打安良禮松なら○安良禮いあらら
うろあられと詞を重ねたるふり　ねて跡ゝと立たる松原をいふあられ

あられうを　俗　魚名のぶりの下ふ注もを

あられぐひ　俗　螺類、外面ふ小き磈礫並びつきて形あられざるふ似たるもの

あられぐま　茶事ふ用ふるあられの形をおきたる釜ふり　茶具備討集　霰

あられごもん　俗　縞布などふ隙ふく霰の如き小粒を染出をいふ

あられざけ　俗　濁醪の麹の溶化せまくして霰の如くゆて交まるをいふ

あられぢ　ぢ音　織物の紋の名、俗ふ石だゝ市松などいふ物を織いだして霰の如くあるふり　續世繼六

あられもん　中務内侍日記　あられぢのうへの御袴　久安百首
衣手ぞさえわたりけるあられぢのうへふきまじるらけり

あられぼし　正月十六日の踏歌をいへり　釋紀十五　私記
曰今俗曰阿良禮走師説此歌曲之終必重

称萬年阿良禮今改曰萬歳樂、是古語之遺也、公事根源踏歌節會をば
あらればゝ〳〵りのとよのあらればやもや

あられふり 枕詞

万七 霰零鹿島の崎と 又三 霰零きつゝ
がれけを 又七 丸雪降とわつおゝその〇鹿
霰の音といふ意あり

あられるあた 俗

あるまゝきと
いふ同ド

あらをだを 枕詞

貫之集 おら小田をかへすぐも〇荒たる
田を犁えすをと反々とのひらだゝたるあり

蟻類の總名あり種類各條ゝ
出せゝ 字蟻 阿利

そこふ存在するのありくりありかよふ
ありたゝるなどのありあり次下ゝ出をとるべし

ありあり

心よゝくてありるこらへてあらるこるなどの
ありゆとソレヂアラレル といふ意あり 宇 あと宮 宮

おゝそこたまひてえゝらぎうるこるのいきやうざゝあるえうの物あり猶とめつるあり

ありあり

ありあけ

つれおゝそえゝ別ようあうつ
ゝをおひそゝ面ゞけのあり

ありあけ 攝津 俗

ありあけあんどん 俗

ありあけがた

夫八 きりけゞありきう祢ゞゝびゝ
ゝをべて五月のおゝゝゝゝゝ

ありあり

ありあり

上ゝさおゝゝの乞様あり或ゝや
式云ありゝゝの聲やゝゝゝの聲ハ宿徳の人の乞聲也

ありあり 俗

ありあけ

つれおゝそえゝ別ようあうつ
ゝをおひそゝ面ゞけのあり

ありあけ 攝津 俗

ありあけあんどん 俗

ありあけがた

郭公

有の體言あり①有の云云とつゞけの人る言
下のありの云云の條ゝ出をとるべし

鞠を乞ふ聲あり 遊庭秘抄 我け待らんと
思ふ時聲をりだゝゝゝ鞠をこふふあり此

机あどの様ゝ大きゝ平らゝある木の反の
出ぬやうゝ木を横ふそむるあり

十六夜以下ハ夜ハそゝゝ明るゝ月ハ猶
ゝゝそある故ゝ云あり 古今 意三 よりあけの
つきさゝうゝきものいの〳〵 玉葉 意三 ゝう月の

草名きんせんくりの
下ゝ注ゝセ

敲夜附置〳〵
燈をりふ

夜いおゝゝゝゝ月のあるをありあけとゝゞ
もとゆて夜のあけゞたをもかくいふあり

ありふれぬ事ハ
あるべく

鮮明ニ見在
ありてをらふ

ありて
さやかにひかりたるをいふ
在々所々にあるをいふ
万十二 在有而のちるもおそしとのふのをかな
つそありてやみがたき問へりけまぢ 又雑二 男のまでこでありてゝ雨のふる夜大が
とるべきあめり 又夕霧 ありて未ハはぐらかすべきことやあらん

ありうる
有情無情のものホこれりてのおもかぜも称許等安里衣牟也さぬるよのめあるいもがそえぐら
あくまで 又 あれやこれやのむろの木そるれそあるべし

ありうる。ことさら
いふあり 四十二の物あらかひ 人の身ホおのづからありうるをいふ

腋臭あり胎毒のもとて脇の下のらさぶい生あぐらある臭あるまぢ體言ホありうるとし 乳母雙紙 人の

千載雑 真柴ふく宿のあらまれホ夢さめて
ありあけのそら
ありあけのつき
ありあけのつきよ
ありあひ
ありおふ ハヒフヘ
ありおへる ラリルレ
土佐 至もろ〳〵國ゆそぎ子うめるものどもありあへる皆人とやることろふ子どものだきろくおりのがりまぢ 山家下 ことのものみさびたるをいふ 折
ふ〳〵ふおりおふ身こそ
悲〳〵ろうけまぢ
ありふ。あり
。ありふ

ありあふ
いつふあり
ありあひ
そこふおり合ふをいふ
ありあへる
あり合ひてあるをいつふあり

鞠を亡ふ聲あり
蹴鞠大概 人のこふ時我こひかたんとて折

候て云云七のおうろとうゝあふぞうり御たゝあそ
候へ 和 胡亀和岐又謂之狐臭

ありろ

おうどころあうりかいせこかのかおあうの
古今雑下 風のうへおありうさだめぬ塵の身い
ゆくへもろゝ成ぬべうあうり 拾遺 拾遺愚三 ひとせこがありうもあゝそ
移たる夜のおうつきかたの枕さびゝゝも

ありかぜ

おりかぜふせむ 辨内侍日記 かぎうのおぎうのたゝ千代のおあうの
おううぜいけふうそうともうきゝゝとぞ思ふ

ありがた

有難きの體言あり 源靖蛉 そうしようも
有がたの世やと思ひあたまくう

ありかたき ク シキ

存在ゝて アリカネル をのふ其所ホ アリカネル とも
おりがたき ふ人ほつ死て遥 いゝふあり 散木中 昔ハ親ゝかうゝ人の世の
家長日記 ありがたき事とや思召けん出ぬる事をろもをゝ死事とあうを

ありがたき ク シキ

ルヰガナイ マタトアルマイ あどのふ意あり 万十七
げもてあそぶる御かたちこそ 金葉 雑下 ありがたき法をひろめゝ聖ぞ打見ゝ人をちびうもぬる
まれい安里我多之 源桐壺 此こころのおもの出
ろもへおりうたゝくめづらし死ものでこそ給ふ

拾玉四 法ほまひそよふありがたさとうあり
心ふひて人ほかたうゞ

ありがたし ク シキ

有難より出たり
出来ニクイコトあり 源蜻 人おをゝふあうんことも
有がたき死ことと思ひゝろるを
ルヰガナイ人とのふことあり 宇藤原君 けふ
よりもありがた死人々ほかんとて 又蔵開

ありがたなみだ

ありがた死人とものゝ
給ふあん
感涙の義あり尊きおつけ喜そゝもふ
つけて出る涙をのふ

ありがためのもく

表い歓ぶべき死ちゆてろうゆい却て
難義まそうれゝうぬをのゝふあり

ありがて

存在ゝて世ホアリカネル をのふあり 万二 たまよ
つひふ有勝まうも 又十二 あまろ らけ見むろの山のさうゝさ移ぞん
在勝申ほ〇此詞例ゆよるべテツツル
テツツルツンと活くべきあり

ありかぬる

存在シカネル又其處ホ居カネル もろのゝあり
万三 筑波根をよそのゝみうゝ有金手雪消

の道をゐづる
来るかも

ありがてき　シク　形

ありかも

ありかよはせ　サ　シ　ス　セ

意あり　記上用婆比邇阿理加用婆勢
存在〳〵て道を通行せるをいふあり　万二
つゝさゝるも有我欲比つゝらめど〳〵人こそ

ありかよふ　ハ　ヒ　フ　ヘ

あら〳〵弥松いまもむ　又三
安里我欲比つゝらゝ〳〵ぢの道ゆあれかけり

ありき。ありき

人ふさえねがつ　今昔当　かやうの行ひ
かゝる行き速や止むべく〳〵と

ありきあらぶ

そゞめん　新十神祇　さゝえ行く御代のため〳〵
いゆ〳〵ふありきあらぶる神ぞあるらん

存在シテアリタク思フ　を云あり　万六　百鳥の聲
あつら〳〵在果石住よた里のあるら〳〵もゝ〳〵る
毛類めて織たるもの毛氈のたゝひあり
欽明紀奉二好錦二匹騾一領爺三百
在通行の意を敬〳〵そのふあり　在い存在の

ありかよはす　サ　シ　ス　セ

ありかよふ　ハ　ヒ　フ　ヘ

ありき。ありき

人ふさえねがつ　今昔当　かやうの行ひ
かゝる行き速や止むべく〳〵と

ありきあらぶ

そゞめん　新十神祇　さゝえ行く御代のため〳〵
いゆ〳〵ふありきあらぶる神ぞあるらん

小児の歩行〳〵始るをいふ　増鏡六　八月御子の
御ありさまぞめでたく万里小路殿ありたゝせ給ふ

ありきたち　俗

ありきぬの　枕詞

らぶ　又十五　安里伎奴能ありそのちゝめも〇ありきぬの鮮ある衣をいふかぎ
やうとこのゝふ言いもとありきぬやゆゑ
ありきそ衣の重ね着るものあるゆゑ此ありきぬのさゝやうとこのゝふ言をそへそのへる
あるゝ鮮あるよう紀衣ゝ寶とせるの意のつゞけあり十四巻あるさゞ〳〵ゝ
うけ紀さゝめ〳〵を衣の鳴音かよ
鳴ものあるをびあり十五の巻あるゝ

ありきぬ　記下阿理岐奴能美幣能古賀　万十四　安利
伎奴乃さゝ〳〵まぐさ　又十六　蟻衣之寶の子

ありきよはる　ル　リ　ル　レ

ありぎり　俗　〇ありぎり
〇ありなけ

グルマトマリアルク　をいふあり　十訓一　辻のかい
たをりあるとをありへろくもあり紀ゆりけをび
あるかぎり
あり

ありく カ キ ク ケ　足をそこぶるあり歩くこと

ありかをる セ ス ル ス レ　他をして〇歩行（アルカセル）をいふあり

ありかゝむる メ ム ル ム レ　同上

ありかゝる レ ル ル レ　我ぶあのぐらい（アルカレル）をいふあり

ありける ラ リ ル レ　歩行てあるをいふあり

後撰 意五 宇 俊蔭　うつ谷のめぐりはきてとゞめつるかむこゝろもへど　大和　人ゆも志ゝれ給ひけり今めくうてありかせばや　ふとさゝ〳〵がりそ外ざるく　又如　ありそせ給ふ　紫式部日記　さんぐりまかぢ　源 空蟬　夜中ゆこんなどありかせ給ふ　又如　うそぶき

ありく カ キ ク ケ　歩行の義より出て歳月を經過るをいふ　大和　子どもわまさりのぎそおもひで住ける

ありこし　草名、ろろくさの下ゝ注ゝ

ありふる コ キ ク ル レ　本和　漏盡利加名門佐　存在〳〵て来るあり年月を經て来るをいふ　万十七　いゆ〳〵ゆ阿理吉仁家禮ばこそはるくよへふけむ

ありこと　之宮家所由来　遠久矣

ありくる〳〵き シ ク シ キ　存在〳〵てあるゆ苦〳〵ぢをりふあり（扶下上）あるうこうたき御こゝろぞ〳〵もをるとのび給ふまゝゆありくる〳〵もあるべし

ありこし　草名、ろろくさの下ゝ注ゝ

ありこす　。あり　。あるく

ありごゑ　。ありのこゑ　鞠をけ ふ聲ありありの條見るべし

〔松下十巻書〕やの聲ゝ請とる聲ありあり〳〵ふおの〳〵〔蹴鞠大概〕をりふあり聲ゝ自分の聲ありめぐりあり聲をあげめてやさ〳〵くこゝふあり聲ありうろ〳〵ひ聲と

ありさた

ありさだまる 下二段 袍の名唱あり 裝束秘決 束帶着用之次第 袍名所之事あり さだまれる両脇のさがりあり

存在して定まること 栄花 大うたのものさだまりあり 軽く心うへ〳〵 宇槐雑抄 あのづから位ありて定まりて御事どものありさだまらぬことなく久しくあるさま

ありさま

ものごとの殿のありさまあり 類名 消息又 擧動 サマ

ありさる 下二段

有去而の略 あらばありさりもてゆくなり 又云 阿里佐利底のちもおなじ

以前ノヤウデナイ あり 新勅撰 思ひ出てむ うきをあのぶ袖の上ゆゑありしおもかげの月ぞやどれる

以前ニチガフ あり 續拾遺 こせぢやお有しふかき獨ねのヨゴ手枕 ゆくすゑこだを

以前ニスギル あり 新續古 つれなくや祈るとまれどうき事のありしゆゑある神のいづきさ

ありさわる

ありしよりかはる

ありしまこもる

存在して年月を經るをいふ あり 存在の意にて存し在の約言方 四 春風のかとふやに

以前ノヤウナル あり 續後 我ためか心をとめぬ月だにもありしよりかはる影をやどせる

以前ヨリフエル あり 伊 さく花の下かくる人おほくありしふかきさる藤のかげかな 續後 雜下

存在してありしどの世あり 續後 雜下 照月の雲のゐの影いでぬればありしよりをいよ

ありしも

間ふ花をそこらせろくるみ 抹葉集 雲の上ものうて過る時鳥大内山やありつるらん 古三上 ふりわけ 新六六 春の野のわかなつまんとおもひたてこそもゆくへのありしものひもの羽を

ありしひ 蟻

斑あり、尾長く淡黄すこし黒き文あり、脚ほそく淡黄、其舌蛇の如く細く長し能く小蟲を呑ふ

ありそ 磯

ありそき 磯をいふ 方 七 荒磯こそをかありそありそをかふうこのたまものよろこぶ

ぬなと 又十三 家人のまろ〳〵むものをつまもる〳〵
荒磯 をまもるきこゝろかもゝろ〳〵も

ありそうを

ありそまろ 枕詞

ありたゝせ サ四スセ
うへを在立之見〳〵
たゝすくば

ありたゝせ サ四スセ
婆比通阿理加
用婆勢

ありたろ タ四チツテ

ありたゝる ラ四リルレ

ありたゝほる ラ四リルレ

存在〳〵て立つをいふありい
軽く心得べ〳〵

存在〳〵て立てあるをいふあり 万十三 島の
さゝ〳〵安利立有花橘を

存在〳〵て經經そをいふれるとかる
もの〳〵めぐりゆ〳〵をいふあり〳〵軽く心うべし

存在〳〵て思ふところをいふあり〳〵發をいふ但し
敬語あり 記上 佐用婆比爾阿理多々斯用

万十七 きさゝぶたぐうをゆるさもて〳〵
と沢もろをまもるでゝことぶそのものゝさかりゆあひこゝめこそ

ありぢごく 俗

ありづか。ありのたふ

ありつかはしき シク四シキ
さゝのありつかはして物あどのひとまもる〳〵こそ見え侍うけり

ありつゝ

ありつく カ四キクケ
ありつゐありつきゆけり 源蓬生
唐物語 ちゝそ世ゆありつゝむ

ありつく カ四キクケ
こゝをれうたゝみ
ゆゝげゆ

其所ゆ住つゝありつゐ又 緑ヅク をもつふ 守拾七
下司あどもで来てつゝそれあどゝそたゞ

不似合ナラザルサマ をいつふあり 住吉物語 姫
君のよふふたりさありのゆきうりゆて姿あり

虫名ゆとびさうの
下ゆ注ゆ

蟻の土を積て塚の如くふあゝたる
ものあり 類名 垤ツカ

体言

ありつくる　他カ四　其所ゟ住つくるをいふ　常盤姫物語　南無や西方弥陀如来姫を極楽へ具ーて

ありつくも　又曰さうらいのきーのつくさのあるもきたるーきたるべたちかくるゲ縁をたづねつ　万二　在管裳君をそがまうたん　うちもびくーとぶろろそふ霧のあくまのそふ　ありつけ候へ　在下モ

ありてい　俗　有體ーてありの　ありさまあるあり

ありとある　同ド　世ゟあるかぎりあり　枕二　ありとある人ゟたろもちことあつくろひ　又十　そこらの上達部より

ありとある　そこめてありとある人ーらもそこの　たる譜とのふ物のかぎりと　宇治　源若菜上　世ゟありとあることゟ傳そり

ありどころ　ある男の水のありどころを　ふりたるーめ　ある所あり　伊　所ゟきけど人のいき　かよふ所ゟもあらざりけるを　宇拾十三　こゝ

ありとーある　ありとーある　ゐだありけける

ありどほー　俗　。こころとあるーぜ　。はるろう　山中陰地ゟ生ずる小木ーて年久ーた者も二三尺ゟ過ぎ葉掬杷ゟ似て短くーて尖り葉本ごとゟ長き刺あり、春葉の間ゟ白き花を開く、後　拾遺雑恋　いづまをろあるーと思えんそらの山

圓き實と結ぶ、熟ーて紅色、冬ゟ經て落ちず　。虎刺

ありのぎもむる　メムムル　方十三　苅名草甘手ゟのをのたえそこもべ　のへある妹いあぶくーそせん

ありやー　存在ーて心を慰むるを云ふり　万十　かくしつ有名草甘手ゟのをのたえそこもべ

ありやーや　ありやーやの意ゟてかそうのるを云ふり　栄さかえの對　開院の大將あどそそ北のかた

ありやーぬる　そーめの給ひてありやーぬときこえあどそそめれ　千載雑中　小山田の

ありやーぬる　ありやーぬるも煙ゟや雲ーとそゆくーん

ありやーぬる　ありとゟるーとも定らぬ雲を云ふ　天十九　世中ゟ有ーて雲の山の端ゟそもべ消る例成けり

ありのーのひ

政あり因て有無の日といふ此日朝政と行ふれども但し急事あるべし雖非國忌廢務古人傳言不可行公事不可有政云々號有無日

ありあをし

雙せをれどのひづゝひ有雙をれどのひづゝひ有雙をれどのひづゝひ有雙を

ありそう聞えゆゑつゝ　又竹川　ありのみ
今昔六責て問けるに落て有のみ
ありのみ　梨の異名、今も阿波の國にていかゝくりへう
相摸集　さるり過てらもたる梨をとるあり
人の許かやるとて、わきてくへ露
なしあれど千代ありのみてこ人いつゝふるあり
ありのみ　俗　果名、やまあり
下に注也
ありはつる　テルツルレ　存在して終るをいふ　古今　雑下　ありそねぬ
そほでるぐる　玉葉　雑上　何とあるくもきて
ありそねぬるき所るくあげくらん
ありふる　ヘフルフレ　存在して年月を經るを云　拾遺　恋五　ゆり
うばらざりける　源葵　ものうばる
へむと思ひもうけぬ世の中にあるくへ身をそ
かくし　又東屋　心ゆるるるぬ世すいありへ給ふめり
つゝまりふる
ちどふ
ありへい　俗　食類、あるへきの
下に注也

ありまき　俗　○あぶろくあゆこつきらくきらり　細蟲、形黍粒の如し
○あぶらむし　○蚜虫　圓身尖首ゆゑて両の
髭、六の脚ありて緑色あり、後ゆ羽化して風に隨ひ飛去る、此蟲味甘し故ゆ
蟻多く舐る、黒蟻集るとき其色黒く赤蟻集るとき其色赤くあり
各名を異ゆて各條ゆ
載たり

ありまさり　俗　サ〃シスセ
ありまさゝげ　枕詞　万十二　在間菅ありつゝことまで　又十三　有間菅
ありてのちゆも〇ありまの津國の地名ゆ
てそその菅ゆよろ〳〵かりふようそ
さゝありとを重ねる枕詞あり
ありまつ　タ〃チツテ　存在して人を待つ或ゆ時を待つあとを
ありつあり　万四　戀々てあひたるものを月〳
有松より出也

ありまつ　俗　行鳥のむらがりて
あまびこ夜ゆ隠らんまし蟻街　又十三
ゆち有蜷待めく給ひ狩ぐ
ありまつ　俗　○あるまあぶり　纈纈の名あり尾張
有松より出也

ありめぐる ラリルレ
ありもどく カキクケ
ひふたる世の中ゝ心をけゝる
こゝろをやあらむと
ありやあらぶや
ありやう やう 音
びさ〳〵のろげゝたちかくまそこの
有やうをうかゞひそるゝ
ありやあや
アルカイナイカイ の義あり 伊勢物語 古今著聞集 夕暮ゝ命をけゝる
かげろふのありやあ〳〵ふや問もそうる〳〵
有様ゝて有るさまをいふ 土佐 人そみまた
猶〳〵まゝ海のありやうも見えき 太平十二 やまと
ありやあや
拾遺 雑賀 心ありてとふやあ〳〵
ありやあ〳〵やのきうやうり〳〵きそ
ありとの花 クシキ
存在〳〵て宴をのふ 万六 宿志とひとゝ
いへどもかひ書とゝまゝこれをもてと
存在〳〵て年をふる又日をふるあどをいふ
ありける 万十 あきつゆふをあそびめたるまた
存在〳〵て廻〳〵あり 國を廻るあどをいふ 万廿
りこゞをそうて安里米良利こゞふるまゞゝ
存在〳〵て人ゝさうらふをのふありいかゝく心
得べ〳〵 靖中 いざやありもどくまゞうあも

山ふまゞもるふりそ在 渡金 又十八 あく〳〵あ〳〵安里和多流登毛
ろ〳〵ぎそあきう〳〵たゝ〳〵ばかゝ〳〵やまぬぞん
ありこぶる ビフブルブレ
其ところゝ アリカネル 意をいふあり 伊昔
男ありけり京ゝありてびそまゞへ行
けるふ伊勢をうりのあはひの
海づゝをめくふ
ある ラリルレ
あらゝる セススルスレ
無きものうらゆそ
在るをいふ
あらゝむる メムムルムレ
他をうそ アラセル を
いふあり
あらゝる レルルルルレ 同上
あらゝる レルルルルレ 他ゝ アラレル を
いふあり
我がものづゝ アラレル を
いふあり
記 上 久波志賣遠阿理登伎許志豆佐用婆比爾阿理多々斯 古今誹諧 あり
めやゝこゝろをがそゝうあひゝ猶びたらふまあくきよそ戀〳〵き〇これゝ
世ゝ存在 ラヘ をいふあり 宇奈使 けふのふこのけうあるそをあゝせてあそをまた
源澪標 をさ〳〵劣らぬ人ゝ類 ガ ふまて迎取りてあゝまれど 又若菜 誠ゝ少

～もよろこそあ～せんと思ふん女子もわ～まへ～ぶ 右京大夫集 あらるべ
こゝちもせぬよ猶たゝそ今日ゆそふるぞ悲～かりける 拾玉四 吹迷ふ風ゆ木の
葉の何とそ～てあ～るもぬ
世ゆ～猶あ～るらむ

あるかぎり 有限りゆそ アリダケ 又 アリッキリ なり

あるかたち 在る状して物の撰子をのふ 神代紀下 對以事之梗概 又 對以情之委曲 履中紀 同仲皇子

あるきあたる 之消息 繼體紀 聞其行狀 皇極紀 問彼消息

あるきあつかふ アルヤラナイヤラ の意してあるをあるきあつかふ
のそ～うけろ～のあるきあつかふ 後撰雜二 あいまてとろう～とも
水ゆやとる月影のあるきあつかふの世ゆこそ有けれ 拾遺哀 手ゆむすぶ

あるきあり ありきの體言○歩行 貫之集 世中そのげ
きそあるをもせぬそ～そあるあひだ

あるきたゞふ ヘヒカヘ 歌木上 春宮
行ちゞひふるをのふあり 大夫公實のもとろうある紀なはをおれ
ものへのろんふぐもも
あつけもぞ

あるきあるひ 俗 歩行まることを
あるく 加キ勿加 あるふなり
あり～とおやす～○歩行 神代紀下 遊行
阿流久ゆ似る人もあ～や 靈異 万三 河風の寒き長谷をなけきろ～きてそ
類名蹉アル 宇 蹊 阿留久 靈異 三 行 姿留

あるくふ 定めをふ國をさ～そのふ 伊 あるくゆの
あるく あぞうの人のめするそんあること聞て
家の主をのふ 後撰雜三 風霜ゆ色も心もかはら移ゞあるを～まゆあるるゆ木なりけり
拾遺 物名 北家いろるものりてもこ
伊のことのたろ心やそけりある

あるぐ
あるぐ。あるぐ
主人とありて人をもてるをとりふ キャウオウ
の事もぞ行よそやうゞけものろふきてこえ給ふあるじ
フルマニナサウ ろう 類名饗アル 宇 後薩 この殿ゆ
かのぞこそのちの 源若菜下 ゴぎてこ
あゞけちろ紀わゞゆつろ～ろ～
あるぐ～がた 主客を分つと紀越の方をとりふ 涼少女 あるぐ～
がたあ～もこをもも～とさそゞきこそゞも

とうぐ　よつこう
まろう給ふ

あるじがら

あるじのさそ

あるじまうけ
まらうどさき後あて其日のあるじ設けをたてまつりける

あるこそ

あるところ

あるゆゑもあるぞ
あるゆゑもあらぬ身と思ふぞ
われふるさとのうきやまもあるゆゑもあるぞ

あるらん

主人シダイ　といふ意あり　風雅雑上　移ー植ー
宿の梅ともこゝえぬるあるじぞ花も咲ける
其主人を敬ひて呼語あり　源　須磨　あるじの君かくうれへけるぞ御わたりあれ
饗の設けゆてキヤウオウジタク　ナソウノ用　意の意あり　伊　左中弁藤原よきもちとのゝをとな

定めをかる時をきゝてそのふ　持統紀　作光仁天皇　没　類名或ヒトニ
定めをかる所をきゝてそのふ　孝徳紀　一ニ曰
世の中をそおもふゆゑもあをとりふ　伊
いきうとも思ふこんこそかなしけれ
をきゝて源　栗　かをるのこぬるせやふ
あるひとの同じ　又一ツハ　ときゝたのものゝ対へそのふ言あり　古今序　あるの花をきゝて

われよりさだ所を悲びあるの月を思ふらん
あるべきをきゝてふれたどまる

あるひと　定
あ

ゆきちぎりこの歌あり　土佐　あるひと
あるひとのよこせいろこもをそて

あるひは　あ
類名或ヒトニ

あるへい　俗
食類あり　あるへのるの
下に注す

あるへにぎにく　俗
あるへのすて花卉鳥獣を
作りたるもの

あるへにたう　俗
次條に
あるじ

あるへらる。あり　砂糖を煎煉ー餳の如くあたるものなり
。あるへいたう　太閤記　上戸あちんだぶくたう酒云云下戸ゆへくるを
我宗門に引入る事右ふうしなり
あるべうー　シカシ　然らばあるべうもあらず　カウアリタイ　の義
あり　今昔　前栽をゑん所有うーくうあて

砂ごど時たり 又卅二 くくもりて
源玉葛 ものやあやくふあるべくしうかき給ひて

あるべくしき シク 終

餘人つどえ給
へまじ

其身分ふ應じてあるべき狀をのふ意あり
源御幸 人ぐくもそのやうふあるべくしき 十

あるべきほど

世ふある心地程あり 新後雜中 さりとてそうある心地世をも賴む哉あるべき程いとゆゑある我身を無くてあらぬ限りあり 宇藤原君 家の内のてうどあるべきかぎりてくく

あるほど

ほどの程すて世ふある程物のある程ふのくり
續後 憲五 ものをもとんものくもそえぬこと身

あるまじき

誰ごとひける

アルベキコトデハアルマイ といふ意あり
紫式部日記 身のあるまじきまの夢のやうふ

あるまじ

おもひつづけらるまじきあるまじき
ここちふうへおもひくりて

荒海の約言あり 万七 大船を荒海ふ漕出やる孫ゐけ我そくこらごふこそあるくも

あるもの

がりふふかもふ
らん

あるもの 〃〃〃

うゐあるものふの〇生 記上 僕者將降蒙恭之間子生出 万二 藤原の大宮つくえ安禮衛

我物ふてありと思ひをるあり 玉葉釋教
かりそめふ心の宿とあるる身をあるものの

あるもの 〃〃〃

浪風あどの アレル あり 宇藤原君 よるの海ふ玉もろきーあるものをたるるこの
中ゐ日ける土佐 ちそやぶる神ごころをのまごころ見つるる神の心をあるうえふ

あるもの 〃〃〃

神ののりてあれ給ふをのふあり 紀竟宴歌
たる孫こともこあざりせばあふそーあや

あるもの 〃〃〃

田園あどの草のそあるまた家あどのやうをとりふうり 万二 久そのあ見る如くおうぎ
こーこころのそかどの荒巻をーも 古今秋上 里いあるをて人いうりすーやどあれや庭も
ゐぶ花も秋の野らあるる 又雜體 あるきろあるこあれのそあるきる宮のうちい

あるさとは　或童の義あるひとのある不同ド　土佐京の近づくよろこびのおそうホあるさとゝいふめる歌

あるをとこ　或男の義　拾遺長歌　ある男の物のひ侍りける女の

あるをんな　或女の義　古今戀四　ある女の業平の朝臣を呼さだめあをあり紀をそと思ひそよることそつゝ

そゝける　土佐日をふる事をゝばあるをんなのよめるうれ

あれ　内藏式阿禮料五色帛各六匹、下社二匹、盛阿禮料、笥八合、下社三合、上社五合、並方一尺六寸、布綱十二條料、調布一端一丈四尺　中宮式五色絁各三匹、阿禮三具料、楊宮三合盛阿禮料、年中行事秘抄上夜夢ニ天神御子ニ云云取奥山賢木ヲ立阿禮垂種々絲色

あれ　米の粉をゝふ以字餅　粉此間粉米是也

あれ　かれホ同ド〇彼　枕ニあられあるをゝとゝろたるくゝのひけんこそゝゝとゝりけれ　又ハ經あるとやをそゝゝふよゝたるをあるをゝやうホ

あれ　ろれホ同ド〇我　催馬樂妹與我伊毛止安禮止伊留左乃也未乃也未安良々支

あれ　あるゝの體言暴風雨あるとゝりふあり

あれ〳〵　彼々ゝて物をゝて驚嘆そるものはゝるゝあり　吉野拾遺下えゝり〳〵そゝり水のうへふゝえ

あれ　けるとおゝ〳〵とゝりふあり

あれさわる　ラリルレ　ウマレテクル　をゝふあり　万三　久々ものあものはゝより生來神之命

あれさわる　レルルレルレ　アレテスタレル　をゝふあり　今昔六　其國ホ鬼神有て人民を惱亂せ此ホ依て國荒ゝ廢る荒たる田あり　萬尹千首　ちゝ〳〵そよ荒田の澤ホかゝるものあもひこゝゝゝゝ

あれた　荒カ　ウマレテ業ヲウケツグ　をゝふあり　万一　ふゝ〳〵の大宮づゝん安禮衛哉をゝあゝゝゝゝ

あれつぐ　カキクケ

さゝるかも 又四 神代より生繼らへ 万六 八千年ゟ安禮衢之知 あめのしたをさめ
あれやもあるらむ
放心して我と我身を覺えぬやうにあるもあり 宇吹上下 源宰相の御けしきの
あれのはた
古へ正月十七日の大射の時豊樂院の庭上ゟ
着柄、左弟一紫色、次深緑、次緑次黄次浅緑、右方准之、 兵庫式 阿禮幡十一旒各
掃部式 観射豊樂殿設阿禮幡北一丈、
あれはたれどき
明がた夕暮あと漠々くらくして人影定ゟ
たれどきゟ同じ 源初音 あれはたれとゝあるゟ物のあるべくもあらぬ
おぼつかなくこゝろ此殿うちもゆるぎたるひゝやうにあり
あれはろる テツツルツレ
アレキヅテシマウ ことゝいふ意あり 平家五 庭上露ふみあれそてく 天卅一 あれそてゝやとあるにおなじ
よもぎふをあさぢがそこともいふかはる人もなし
あれひゝく。
賀茂祭の日阿禮の賢木ゟ延たる綱ゟ注連着けたるを參詣の人手ゟ取て曳くをいふ

又其阿禮ゟ着たる鈴の鳴るをとゝて祈る事の成るあるをいふ 貫之集
あれひきゝゝろもとゝそそもちもやぶる賀茂の川浪うちもたりけり 山家下
弥々くゝ鈴の
あれほど
彼程とて アヤウニあり 辨内侍日記 鞠のかゝりのもの哉あれほどと左衛門督をそゝらかすことゝよと
あれま
垣ねどの破もたる透間をのぞくあり 新六二
あれまくも サシスセ
生を給ふといふ意ありまことの敬語 万一
たまはりたまはるわびのやうなものかゝりのひゝ
あれやまどふ ハヒフヘ
家あどやぶれ シダラナクナリテアル をいふあり
源末摘花 いとゞもそれゟさびゝうあれまどへるふ松のゆきのこりとまたらぬげゟふりつめる
あれやゝく カキクケ
物の手ナレ もせぬに年ぎりて年月の過やくをいふ
あり 大和 いとゞかく年ぎりもせぬ花ゟ

ぐるまれゆく庭のかげしたのゆるむ山家下ある里のよるぎく宿のあはれぶ
まれゆく庭かまづしげるらむ平家五のきくとうべし人のまゐ日をへつゝ
まれもみて花の都のたぐひなりふねおろすとそうるしけき

あれら

らのやうか聲たそられぬゝとぞおもひしらるゝ

かれらこりふ同じ彼等うり讃岐典侍日記年ごろ思ひつるとど猶おとりけるやあれ

あれとたる

所ゐ又ふゝあけたるおとゝあれもたりそのゝちうさびしげなるゝ

あれたるところの廣く見ゆるを云ふり源氏摘花のことのたうあれこたりてさびしきゝ

あれそゝそ

あれをゝめ歎へて神官の中の祭主とあれる人をいふ朝群十二阿禮乎止古阿禮

あれそとめ

賀茂の齋王をいふむ狩とゝあれの祭ゐ仕へ奉らしめ給ふより由也稱ふり類聚國史五

皇大神乃阿禮乎止賣尓、内親王齢毛老自乃安美毛有ゐ依豆三實卅敦子内親王乎波定天、阿禮乎止女止御杖代仁念侍世ゞ、内親王奈利

あろ

あろ㊊ゐあらう

あろゞ

あろゞゐ同ゝ雄略紀皐ニ見其主従軍

あろ

あろ。ゐあぶく

貢出問曰吾主大伴公何處在也

うら紀身とゝひあぐらう流をそあゐもたのものもろ

水の中ゐ氣を含てふくれあがるを云なり

あろ

あろきてく

○泡沫靈異上漚ワ古今序五水の沫のきえて

あろ

時名謂阿和佐久御魂

あろ志ほ

あろたけ㊊

塩の下ゐ注也

和白鹽和名抄之阿

あろたぐゝき

シクシキ

菌名秋山野ゐ生也、傘深黄すゝて微く褐色を帯ぶ裏面襵ふく蜂巣眼あり

アワテルサマをいふ〇惶急源タ五のことあるをゝしくふあきれたるこゝちゝ給ふ

言葉巻五　あろ　あろ　あろ

あさだちさう 東京俗
下の注ㇾ

あさつる テツルツル
アワテル をいふ
宇惶急阿和豆

あさてそる テリルル
アワテカケル あり 宇拾十二 家のめくりある

あさてそゝ〳〵 郎等ありてそゝ〳〵きてのそく
アワテル 事の甚〳〵きあり 源浮舟 あやあやしとありてそゝひて火ㇵ取やりつ

あさそもの 俗
物ㇵ驚きて心落付ぬ者をいふ

あさそふき 俗
木名、やまかうぞ〳〵の
下ㇵ注ㇾ

あさふたむし 俗 つばきむし
山茶等の枝葉の間ㇵ生じ、泡沫を出し一其中ㇵ棲む小蟲あり、後羽化してとらさぜこゝある

あさもり 俗
酒名、あさもりの下ㇵ
注ㇾ

あさもりきう 俗 あさもりあよう也
○よあかし
外麻の類、苗葉短く葉深緑光澤あり、花白色、四五月開く

あさもりあよう也 俗
前條ㇵ
注せり

あさもり だひ 俗
鯛の肉の上ㇵ雞子の白を灌てむし〳〵たるものなり

あさもゆき
淖の如くなる雪なり 記上 妹淖雪蹴散 万八 淖雪くはだれふるとこそまでふれ

あさもよこだそうふ 俗
豆腐の極めて柔脆なるものあり

あさもよの 枕詞
記上 阿和由岐能和加夜流牟泥遠 万八 淖雪かけぬべきものを〇阿和由岐能ㇵ淖雪のなり、次の句ㇵ弱やうなる胸をいふ言ㇵ物の未だ成りかたまらぬ意あり、それを轉じてやはらかゝるものゝ形容とす 淖雪より連く意ㇵ柔らかなるを美る方あり、万葉なるㇵ雪ㇵ消やすきものなるから消ぬとつゞけたるなり、けぬべきものをとㇵ死ぬべきをといふ意あり

あさもよ 俗
小兒の戯ㇾあゝと聲を出してㇾ口を敲けばあゝと聞あるをいふ

あさを。あさ
紐の結ひやうゆえ後世のあらびむすびの類ありとㇾいへどもとたゝ一つあるのみ 万四 玉の

のちゆるもあをさらめやうも

あををくふ 俗

驚きあをそれる
さわぐをいふ

あをる

淵を口中より吹のだすをいふ又人と苦
しむるをあをるといふもるるをいふ

あを。おなじ
あをゝおなじ

藍草すて染たる色あり
類名藍

深緑色より採収して染料ふ用ゐるなり
本和藍實駿和名阿乎美和藍染草也澱阿井之流

草名蓼ふ似たる草すて高一二尺夏月
穂をの〳〵花を開く又蓼の花ふ似より此葉

あをかは

藍すて染たる革あり、摸擬を付たるもあり
菖蒲革おとの類あり 飾抄下 魚文藍革青簾
紋ある上を藍すて襖

あをがへ〳〵 俗

染たるものをいふ

あをがを 俗

染料、うつ〳〵をなの
下ふ注せ

あをがめ 俗

おおつぶり
ふるび

あをこびちや 俗

染色こび茶色ふ藍を
帯ひたるもあり

あをざめ

伊豆及駿河蒲原より出づ蒲
ざめあをざめあをどろけたる年
きふ夢ぞおどろくおあをざめ 駿
沙皮藍の名あれども其性ハ白
蒲原沙皮と
いふもあり

あをしる

藍色を染る汁をいふ 和藍染草也
澱和名阿井之流類名澱シル

染料、あををふ
あるもの

あをぞを 俗

絹布の類を藍ふ以て摺たるもあり 人車記保元
三年八月十七日、御厩舎人装束四具、山吹色引
あをぞり 陪木、藍摺袴 平家九 ひぐちの次郎いうう人たち〳〵が
ゝ申けるがあをぞりのひたゝれ

あをぞめ

藍すて染たるもあり 大名出仕記藍染小袖の事
可然候若それ〳〵ふ相應候撰ふ染候て用候

あねたけ（俗）　菌名、上野諸山中ゟ産ス其傘藍水ヲ澆ぐゞ如ㇾ

あねたけ　備前（俗）　菌名、そろだけの下ゟ注ス
備中

あねたそ（俗）　草名、あねの下ゟ注ス

あねたま（俗）　染料、藍葉ヲ製ㇾまろめたるものなり

あねつぼ（俗）。あねづめ　物ヲ染むる藍水ヲ貯たる缸ヲいふ

あねづら　近江（俗）　菌名、そろだけの下ゟ注ス

あねづる　伊勢（俗）　同上

あねあゝ　藍色のあゝ革ヲいふ　世俗深秘抄　平緒

奈女志の時ハ　用様飾剣ゟハ紫淡紺地不ㇾ依ㇾ剣装束但藍
下用紫淡

あねねもそ（俗）　染色、あねもと帯びたる猟ぎもと色なり

あねのを　藍ノ實なり薬用ゟもあねの下ゟ注ス本和藍實　和名阿乃美

あねぞたけ　藍ヲ作る畠なり　新六　播磨ある鈔磨ゟ作るあね畠ぢうあるぐちのこ染ヲいふん

あねるらふ（俗）　染色、せんさの茶の少ㇾ濃きものなり

あねを。さゝだ　藍甕の上の沫ヲ取り乾しゐる者又舊藍布ヲ集め煎ド取たる繒の具なり

あねを。さどう　纈なり、五色の一、藍ゆて染たる色ヲいふ

あねを（俗）　緑なり重の色目ゆゝ常ゟあねをと稱ス

あねを　青驪馬ヲ。りふ

あねを。ゟもを　色の青より出て未熟の義あり
青さぶゝひ青女房ぢのあねをなり

中務式　元大儀日、輔着浅紫襖、弾正式　元諸衛府五位以上通着朝服其着
胡簶并立仗之日、着位襖、但參議以上、不在此例　近衛式　大儀（謂元日即位及受蕃國使表）其日

寅二刻云云大將着武禮冠淺紫襖又中儀少將已上竝着位襖衛門式大儀
其日寅二刻云云督着武禮冠深緋襖繍襖將軍帶中儀督佐竝着位襖

あを

上のあをとハ別なり注あをゝの下ニあり

三實サ 令相撲國送綿一千屯於出羽國、

ひとろづゝとゝのふ 今昔廿六 白き布の襖とりつゝ着たる

參りけるニ小田中明神のもとゝいふものゝ

田うけるニハのあをゝといふものゝ

うゝときゝそめのゆふかけ

あを

老着之虫襖一説爲玉虫色但夏季着否、存異儀歟 宇嵯峨院 山ざくら

下ニ注ニも 裝束至要抄 白襖表張生 自年少至宿

將ハ青色のあをゝろのさゝ 源關屋 せゞやうさとそつきのでたる

旅もそゞろなどものゝろゝのあをゝ

さゝるかたちをろ

ゝうゝゝ

あを 薩摩俗

魚名、あをふだひの

下ニ注ニも

藪の紅色ゝゝぎゝる者初出の葉ハ白くゝゝて

灰を撒る如ゝ、長まれゞ緑色ニ變ニも○灰灰

豆類、やくさのうの

下ニ注ニも

あをあは俗

穀名、あはのよゝ稼の

下ニ注ニも

あをあぶ俗

虫名、こまぐろの

下ニ注ニも

あをあを

青葉を吹こゝる風をの〻盛衰十三 岩根ニよ

ゝる白浪ハ時さだめのゝき花ゝゝ尾上ニ

あをい

そばむぎの異名なり

大女鵜名事 そばあをい

あをいろうるばを

あをゝろうるぐゝ不同一 紫式部日記 なぞの

かゝのゝろゝのあをゝろゝるゝゝのかゝゝ

上ニ同ときゝぐちんの注見合セゝゝ 源少女 人々

あをいろのろ。きくぢん

中ゆゝも藏人ハ青色ゝゝるゝゝゝゝゝ

なゞふたゞ青色ゝゝき雨ふぬるゝ

皆青色ニさゝゝ重物ゝゝき給ふ 又澪標 六位の

枕十二 むゝの藏人ハよゝるゝのゞと人のゝと

そもゝゝぐりるゞゝけるとゝ

あをうなさ 俗
草名浮萍の一種葉小く攅まりて水馬歯の如く面背共に緑色水上に浮びて生ず○青萍

あをうみがら
あをき青、うみがら、海の廣く平らかなるをいふ 神代紀上 以天之瓊矛 指下而探之是獲

あをうま
そらん人の限りをいふ

あをうまのせち 名音
正月七日の左右の馬寮青馬并一疋を庭中に引き天皇御覧ぜらるるなり 文實四 仁壽二年正月甲戌、幸豊樂院以覽青馬、助陽氣也 延喜 内裡式上 左右馬寮引青馬 土佐 けふあをうまをみるなり 公事根源 白馬節會、七日云云

あをうまのぜちゑん 音
春華門の内をいふ正月七日白馬節會の時馬寮の官人の陣列する所なり 拾芥抄中

白き馬をいふ 天武紀 鯨乘白駒以逃之 万廿 みづくさのかもの羽の色の青馬をけふ

あをうみ
青海の表のをいふ 千載離別 教へおくかたを深く忍ぶるん身にあを海の浪のあればぬ

あをうめ ○もとうり
青梅の實をいふ 常盤姫物語 おくそもきそもまもれ青梅うちぐりうちひぐ〳〵

あをうり 俗
越瓜の皮色青く〳〵て光あるもの常の白瓜よりは後もて出づ○田雞瓜 和 青瓜一名瓜名、よるづけうりの下に注せり

あをがきやま
木の青々とかげりたる山のめぐりてあるをいふなり 記中 夜麻登波久々尓能麻本呂婆

多多那津久阿良加岐夜麻碁母禮流
万一 青垣山神のまもるところぎと

あをがへる
生ながら葉の青きをいふ御食物に敷んため 内膳式 山城國所進供御青攅毎日一荷五十把

あをかはげ
蜥蜴の青きを帯たる馬の毛色あり

あをかち
褐色の青きあるもの 弾正式 凡弾正以下云云 通着皂及躑躅染青褐

あをうちざる　鳥の膸の羹あり 庖丁聞書 あをうちざる
そこつきたるを能たゝきて鍋ゐ入云云鳥の肉を入る

あをがづら。さゐかづら。あをつづら。つづらかづら。つづらふぢ。やまとぢ。はらさづら。ちんくかづら。めつぶしづら。やぶうじ。うまのめ
山野ゐ甚多し、蔓至て長く葉互生也如青葉ゐ似て厚く短毛あり、圓尖ある者、楕尖の者、三尖の者等葉形一ならず三四月新葉の間小花ひら〳〵抜萊の如し後圓實を結ぶ大さ三分許熟して黒色淡青粉を帯ぶ 本和 防已 和名阿乎加都良

あをがい　青く染たる革あり 飾抄下 毛車懸青簾
死文青草緒等也

あをがひ　螺鈿をいふ近来ゐ
九孔螺を用て造る

あをがひのから　青貝と惣體ゐぬることをたる鞍あり 御供故實
青貝の鞍の車若き人々のめし候やうく候

あをがへる。あをがへる。ひきがへる。ひきくがへる。ことくがへる。とのがへる。
蛙の緑色にして水中ゐ住を、聒く鳴者あり
和 青蝦蟇 和名阿乎加閉流 漢字 蜻蛚 青加戸留

あをき　クロキ
あをげく 祝七 うたうたふあをくゐはふくゐ枝かたちてのごとくつやくゆて
あをききうま　白馬をいふ 字 騮白 色又青色 阿乎支馬

あをき。あをきゞば
開ㇾ花形束の如き實を結び、冬〻紅熟ㇾ中古誤て古の櫁ㇾ之、非なり
○桃葉珊瑚 續古神祇 西の海やあをき原の塩路より顕ㇾ出し住吉の神

あをき　クロキ
常緑の小木にして大なるゐ丈餘ゐ至る、幹青緑葉長三五寸、粗鋸歯ありて對生ㇾ細小花を

あをきうま　白馬をいふ 字 騮白 色又青色 阿乎支馬

あをぐろ　重色目あり 二條家衣服 あをぐろ
あをてき、うらもきぞ

あをぐろ　重色目あり 口傳抄 青唐紙面經

あをくも　薄青緯萌黄、裏青
物の青く干つゝをいふ 平家 長門本 九月ゐ
霜ふりて秋もやゝ散〻秋穂ゐ熟せもて

青く染たる紙あり 字 あを雲 ほうのつくゐゐ
ゐのあをかみ、あをがみ、ふのうへこふぢ〳〵るゝと

重色目あり 口傳抄 青唐紙面經

薄青緯萌黄、裏青

物の青く干つゝをいふ 平家 長門本 九月ゐ
霜ふりて秋もやゝ散〻秋穂ゐ熟せもて

あをきぬぐさ
青き絹まて貼たる蓋あり 万十六 吾せこがさけてもたるすがたは似るも青蓋
あをたきり
青き色の霧あり 皇極紀一色ノ青霧 周起於地
あをぎた 俗
物稱 八月の風をあをぎたと云ふよりそれて北吹風あり
あをきまこ 俗
豆糞ふあをきまこと雑へわる物あり
あをきつつな
山茶の異名 八雲御抄 椿云云
あをぎり ○きり ○あやぎり ○あをうと ○あをゆよろり
樹直ふ聳え多く枝を分つ皮青緑色あり其葉三尖夏月枝頭ふ小花攅り開く五瓣黄白色後實を結ぶ圓くして大豆の如し 和 青桐 梧桐 崗桐 椅 梓 野 名貴 梧桐者色白有子者 今案俗訛呼為青桐是也二音讓土
あをくらき
青き草の義あり 神代紀上 素盞嗚尊結束青葛以為笠簑
あをくらき 俗
青草の香をいふ又それふ似たる香をいふ○草氣
あをくらぎぬ
あをき絹 儀式三 藍地、青草摺綿袍一領

あをくらのいろ
面の茶色たるをいふ 字さるの院 集りて惑ひ給ふ北方ハ青草のいろふあり
あをくらびと
重色目あり 胡曹 青丹黒氣あり、裏青 裝雜面青、裏黄又朽葉
あをくらも
頸の青き鴨をいへり 古節 青頸
あをくらもる
大虚空の蒼く見ゆるをいふあり 祝詞式 祈年祭 青雲能靄極白雲能墜坐向伏限 万十六 のやうひ
このおのれかこそび青雲のたなびひきそこそめをぞふる
あをくらもの 枕詞
たる空の蒼き色ハ鮮明ふるもの故ふかくつつけのふるもの、万葉ふもよ雲ハ山嶺ふとより立出るものふれば出来とのひらけたるもの
あをくろ
青く黒き色あり 類名 黯 名
あをくろ 伯耆 俗
草名うばらの下ふ注せ
あをけら 俗 ○あをきつつき ○きげら
啄木鳥の一種、大さひよどりの如く、頭頬及膸深紅色、全身淡緑色すして嘴足黒し

記中 青雲之白髪津 万十四 安乎々毛能りてこきもこ○白とハ物の鮮明ふるをいふ霽

あをこ
のとりこのり 武家調味故實 青粉
粉ニして云云その上ふころびたるものを
あをごけ 俗
あをごよ
あをさ
あをさ 俗 ちさのり
あをさ 和泉 俗 ゆづあをさ
がなあをさ
あをさ 俗 かうそづく ○ふのあをさのり
○やちやなど ○あをそ
あをさ 紀伊 俗
あをさ 俗
あをさだ

古い青海苔の粉をのべ後世ゆかく皺葉茶の葉を乾し、末すりて食物ゐ緑色をつくるもの
青粉とのふ青のりを
土石樹木などゐ生ずる
青き苔をいふ
青き毛色の駒あり 方言 青駮の足掻を
そそぐと雲居ゐを妹ゐあくりを過て来ふぐる
海中の石ゐ着て生ず、形紫菜ゐ似て緑色乾して紫色ゐ變ぜず粘あり食用ゆ ○石蓴
海中の石上ゐ生ずして葉前葉の如く
緑色ある者賤民の食あり
流水中石上ゐ生ず、極て細く絲の如く
緑色採て食ふべし ○陟釐
海菜の葉糎き
ものあり
果名、ふぶりの
下ゐ注ず
鳥名、そそぎの下ゐ注ず 雲御抄 あをさぎ 東十 以青鷺羽雁表筈 是曩祖將軍

令征伐奥州梟賊之後
歸洛之日用此式矣
あをさだ 伊賀 俗
伊勢
あをさのこよ
あをさの 駒 庭訓往来 河
原毛青鵜
あをざ
青麥を炒て磨すて碾り絲の如くありた
人のもてきたるを青きうちやる
艶ある硯の蓋ゐしきて
あをざし 俗
縅ゐ貫きたる錢をのふ人ゐ錢を贈り與へ
なども云ゐ青苧の縅ゐ貫く故ゐ青縅錢
とのふべきを略しそ
かくいへり
あをさぎ
毛色形狀はぐひに似て小く青色ありを
野の草ゐ取入あをさぎ ばかりのふ 西園寺鷹百首 小鷹部 春の
青さぎとのふ
あをさぎの
あをさぎのこゑ

あをさい。さば　魚名、形いわしに似て、鱗至て細く其背正青すじ中ほ蒼黒き虎斑あり、大さ五七寸より一尺四五寸ほ至る尾邊相對して　和鯖和名抄佐波

あをざむらひ　形状珊瑚ほかあかく緑色ある者あり○琅玕

あをざめてゐる　青の未熟の義、いまだ成立せざる士をいふ微弱の義をとれり　宇拾七父母も主も京家の青侍有けり　太平二七大寺詣あとまもる面色あをの青くなりたるを云ふなり　あよ行物語とあるぞ正よし仰らる藏人あをざめてゐるり出ぬ　七十一番職人歌合色かりて人ホ心を　らだきぞひ青ざめもろる戀もも

あをざめ　殿御分一足青鰒武田五郎進

あをし。あを　かうほ雑令元官戸奴婢三歳以上毎年給衣服、云云各布、襖褲襦各一具　三實当令相摸國送綿一千屯於出羽國爲充造襖料也　弾正式凡庶人以上、不得襖子重着　左右馬寮式凡行幸御馬一疋馬子八人　右兵衛二人、馬部六人、其装束人別絁袍衣裏曰襖子頭ヌズ　衛門式凡番長二人会云門部大襖十領、料細布紺白各五端綿一百屯屯別十　和襖子之阿乎

あをそ　あをそ　童女の服さるもの　宇藻原君うへの裁縫の鉗脇あるもの衫ホあをく　源蒹葭下あをそ　宇藻原君うへの御そ　又梅花笠ほそ　二人きそ二人あをそ　のぞりあるもの　宇擁の上ろうの上ホひそをいふなり　青藜すて今のふせのこと　ろうせてふらせ給へう　秘九あをそ　のうたもやうせ　うめのロホもそらびのあぎりあるの

あをだ　攝津兵庫　あをそ　歌名、かの名ての下ホ注ホ

あをとど　鮭底魚の一種一疋白く一疋青きものあり　鳥名、のごとく似て微し大なり頭背ハ黒く羽褐緑眉淡黄褐色腹微黄翼

黒色褐緑を帯ぶ尾と喙黒色脛の濃擅子色なり、
秋中多く来る食用ゝ供ふ○蒿雀

あをし〳〵
あをさぎ俗

あをざらつるゝ。あをいろ。やまとことば。
。きくちん。あをしらつるを

草大九十六斤、紫草六斤、
灰三石、薪八百四十斤

あをざりごい

まちる事あり、入道法師あるいは
せぬものあり

あをさそご

あをさを俗。あおざを

あをさぎ

青き染をいふ 赤染衛門集下 あをしをゝ
よませて刈げん紅葉い

色の青くあるのびくるを
いふあり

あをざらつるゝ。あをいろ。やまとことば。 青色をもびたる白樫あり
。きくちん。あをしらつるを 縫殿式 青白櫟綾一疋 新安

あをざりごい

縹色ゝ染たる靴あり 酌并記 青あるがい
かくちやかえざるのいろを當世皆人の

あをさぎ

はそそごとゝいふ上をうすく下をこく染たるあり
玉海 治承二年 手振十二人、紫褐青赤濃袴
藍らんを以て墨形ゝ
製したるものあり

紅熟ぜして食ふゝ堪ざる李をいふ 新六六
かもぞうぬる山うけの青はりくさいある

李の一種、實熟ぜずとも
皮色青きもの○青李

あをさぎ俗

青き草を擂り梅柳小草蝶鳥等の文を刺
しゝたる扱すて擂の如く擂たるもの但し〳〵文

あをさぎ

青き草ゝて擂りたる服衫又狩衣等あり
左右近衛式 凡臨時行幸料青擂杉二百領、料
雅裝 ぐいもうの

あをさぎ

細布一百端、絲一斤九両、生藍四十圍
きうそ〳〵そくたいのりあをぞぎりのもうもうる

あをさぎ

鸕鷀の一種あり、黄鶴鵠ゝ似て最
小く大き巧婦鳥の如し

あをさぎ俗

麻の粗皮麻縄等ゝ
撰べきものをゝふ

あをそ 近江俗

蛇名、あをだいもやうの
下ゝ注もゝ

あをそ 俗
苔名、酢鷲の下に注せり

あをそ 俗
果名、あをぶくの下に注せり

あをた 俗
苗の生たちてあをく〳〵たる田面をいふ

あをた 俗 ○きんちやくだこ ○ゑまはぎ ○きんちやくうを ○びろうどうを ○きやうげんばう 鱗色種々ありて一種きやうげんばうと云 似て短く腮傍大刺を出せり 鱗極めて細く皮天鵞絨の如くゆて青色の横筋あり 大抵こせうだこの小人の害をなさゞる○黄頷蛇

あをだいさやう 俗
笛の異名 散木中 あをと竹を雲の上人あたゝて、春の鶯さへづるとよめり

あをだけ 俗
青き生竹の幹をいふ

あをだけらさや 俗
緑多羅絨をいふ

あをだま
青色の玉をいふ 祝詞式出雲神賀詞 青玉能水江玉乃行相尓

あをだま 俗 ○むしのさなぎ

あをち 音
おなるゆゑにきうりけり

あをぢのにしき ぢ音
錦の地の青きをいふ 盛衰ノ三 畠山庄司重能が子息重忠ハ萌黄威の鎧着て 太平三 道のかゝる塚をいふ 大平三 道のかゝる塚のうへに御身をかくさせ給ひてあをらさぬ

あをちや 俗
茶色の青をいふ

あをつか
草の青々と生たる塚をいふ

あをらさぎ 俗
草名、あをづらの下に注せり 拾遺物名 野をもはら春めけりあをづらこやなるらん

あをづら
若菜つむべく 宇後萬 あをづら大なる籠もらんて

あをづら 枕詞
古今 盛 あをづら人は来もこず 拾遺 雲 青つゞら又来る人も〇あをづら青葛ハ長く一種製造の玉
色淡縹なり

錦帛などの地の色の青きをいふ 天十五 いろ〳〵青地

あをつゞら　つゞらの葉の青きをいふ　新六　のめづらしきものすべて刈とるゆゑ手あをくなるをいふ枕詞としたり　心挙ふ茂るまゝに掻つゞら物をおりふくろ哉

あをと　青き礪あり　和　礪礎和名阿乎止

あをとかぎ　俗　次條ゝ注也

あをところげ　俗　○あをときの條ゝ注也　石龍子の一種、瘠小ふしてながさ四五寸青色をおび其尾最青碧ある　ものをいふ

あをどき　俗　土佐國より出るあをきかをなり

あをとんぼ　俗　蜻蛉の一種色青きものなり○青蜓

あをどろ　備前　俗　草名、あをゝゝどろの下ゝ注也

あをな　菘、蕪菁、等を兼て呼名なり　記　下　夜摩賀多迩麻祁流阿袁那母　和　蕪菁和名阿乎奈

あをな　御贄甲斐　非支青梨子

あをなし　梨の一種、形稍長く皮の色青く〳〵て早く熟し味佳なり○青梨　宮内式　諸國例貢

あをなまこ　白めたるが能

あをなを　舟のうへにあるをとるさまをいふ　万八　青波ゝのゝゝれをぬ　又ナ　安乎奈美ゝ袖さへぬれてゝ

あをなめ　青きなめ〳〵くつゝり　世俗淺深秘抄　下　東宮護劔云云裝束青澤蒜　助無智秘抄　あをなめ〳〵の裝束ゆゐだんのひゝとゝもちゐるぞ

あをふ　重色目なり　鷹衣青　丹濃青差黄表裏同色　源　葉下　あをふ〳〵柳のかさねえびぞめの

あをふ ○はろくまめう
土中ゟ生じて塊をなせ、外面虎斑あり
破るゑ内ゟ白紋あり上品なる者緑黒、次
みどり者緑畫料とす
[證]緑青 [和名]安乎仁 [國]長門國

あをふ 俗
下のあをゑに
おなじ

あをゆぎそ
麻を以て神ゟ奉る幣ニあまたとりふ織さる
布をもちひ又ゑ絲よあたりあをくなるをもて
用るあをゑニこれゆぎそふくの約言わすり [記]上 於二下枝一
取著白丹寸手青丹寸手而 [吉拾]今長白羽神種麻以爲青和幣 [古語拾遺]

あをゆさい 俗
年若き男をいふ青ゟ未熟の義
二歳ゟ小魚の称あり

あをゆこう 俗
形雞の如くゆゑ足長く、朱紅色尾短く総
身青くして黒を帯ぶ胸碧色頭淡褐ゟ
くちばし嘴紅、紅肉冠あり
骨項の類あり ○青雞

あをゆび
重色目あり [飾抄]深花田、裏同
今昔ニ青錦の狩衣袴さたる色あり [源]さくの
えのだゟ青ゑを帯たる色あり
けしきそめる枝ゑこれあをゆびの紙あり

ふそつけてさ
置てゐのけり

あをゆふ 枕詞
あをゆふよの

あをゆふやうぼう まうぼう音
應仁記上 青女房僧比丘尼達の計らひとそ
記下 阿袁備余志那良袁須疑 [武烈紀]阿鳥儛與志乃樂能波波袁摩儛備 [万二]青丹吉奈良
の山 [又五]安乎介余期 ゟ
土をいふゟの呼出也 舜ニゟ助辭
奈良山ゟ青土の多ゟゆゑ青ゟ同じ古へ
御世ゟ御軍士の草木を蹈趨まゆゑ
御軍士の青土をふそあゆゑ地とりの意のつゞけゟり万葉五巻ゟゐ
枕詞をやゞて奈良とりふ意ゟ轉じ用ゐたるゟり足引とのそひて山
のこてさそる
同意ゟり

あをゆよろう 俗
木名あをきりの
下ゟ注ゑ

あをゑ 称
草名そこ称ふさゟ
下ゟ注ゑ

あをゑかづら 俗
草名さるのあとりゟの
下ゟ注ゑ

あをのく　加知久知

うへをもとゝりあふぬくことあるべし　下學集
候まり○後三年記ニ景政手負たりとてそのけさうのふしぬ云云とある
のけさうのもあをのけさうのもあをのけさうの約言あり

あをのくる　久知久知

あをのうせの約言あをのけまり　盛衰ノ二　家忠
うぶくとふりあをのけゆんづるつ記　太平一
まうのおんをうちうつぶせとやうて
まさひきあをのけくるをこれバ

あをのける俗

うへヲムカセルを
ゆくまり

あをのま

催馬樂　呂の曲名

あをのり　○ゆとあをき
　　○うはる

白馬

海中ニ生ず、繊細緑色陟釐の如し、採て食
用とす諸國出ず所々小異あり○海苔菜
民部式　伊勢國　清苔五　本和陟釐
一名水中苔　和名阿乎乃利　俗用青苔

あをは

樹木の緑葉をいふ中古以来多く新緑を
さす　万八　秋の露うつくしけり

水鳥の青羽の山の色付そめバ　金葉夏　夏山の青葉
まだうのおそざくら初花よりもめづらしきかな

あをば

鳥の羽の色の青きをいふ　源若菜上　水鳥の
青羽ハ色もかはらぬを秋のあることそけき記
こゝろもと　金葉秋　とゝもとる岩間をくゞる
鴨鳥ハものゝ青羽もつこゝちよげ

あをばかま

青色の袴をいふ　助無智秘抄　小朝拝左右衛門
左右兵衛督の隨身ハのつもあをばかまをぞきたり

あをばさゞえ　丹後俗

蟹類、いまだ小の
下ゟ注ス

あをばしの　枕詞

万二　青旗木旗のうへを　又四　青旗のうら
らき山又十三　青幡のおきその山ハ○契冲の
説ゟ木のあをばうつくしのもとひのゝもとゝよめる青旗を立たるあさうふこゝろ
なとゝよめる枕詞なるべし〳〵と云り又　冠辭考　万葉略解　ゟ説あれど
何もとゞもけゆとも覺えぬぞ
猶考ふべし〳〵

あをばち俗　美濃尾張　三河俗

蠭蜂の一種、長さ一寸許の青黒色
細腰の蜂をいふ○青蜂
菌名もとゞだけの
下ゟ注ス

あをばづく（俗）　鳥名、鵰鶻の羽色蒼黒色あるものあり其尾長く白晝物を見ると異とせず

あをはうねぎ（俗）○あをそろ〳〵　虫名、の條つきこまろの下ゐ注せ

あをばと（俗）○やまもゝと○あゆまもゝと○ひうづもゝと　狀鴿の如くすこし大あり全身緑色ゆゑに黒をおび胸微黄ゆゑに緑色の斑毛あり腹ハ白色緑文脚紅色○青鳩

あをばどり　草名、つきこまろの下ゐ注せ

あをばな（俗）

あをばな　繪具、うつくしきもの下ゐ注せ

あをはなかいこ（俗）　桃蕊　鸚色云云青花ゐ墨を入也

あをはなをだひ　對馬（俗）　鸚哥の一種也、大さ鴿の如く、遍身緑尾黒くして碧點あり、両翼の裏鮮紅

あをばのやま　魚名、はまをだひの下ゐ注せ

あをはんめう（俗）　虫名、まだらむしの下ゐ注せ

あをひえ　竹ゆえ作りたる刀、兒の臍の緒を截る具あり　神代紀下以竹刀截其兒臍和名阿乎比衣

あをひとびさ　人の生を出る事を草の弥益ゐ生茂るゐ譬へそのごとく人民の古名　記上　宇都志伎青人草之落苦瀬而　神代紀上　是物者則顯見蒼生此云宇都志枳阿烏比等々佐

あをびれ　色の青くシナビル　をいふあをびるの體言　栄蓑花　ふるこころもちのごとくかくのごとくなるをいふ

あをびれをとこ　青びれ前ゐあるの　狹一　若き身をこそやうふこび悲しめ青びれを男ゐようして命

御食之時　万八　あをのつゆいうつ〳〵ありけりこゞとりの青羽の山の色付くまでに

あをばえ。ろづ〳〵　色蒼黒ゆゑ大さ四分ばかり聲高き蠅なり　宇國讓　あをばえのあゝうんぬゝゐ

たちさうもせでありそまさごばえ○蒼蠅

あをびるゝ 絶えぬべきさま

色の青くそあをびたるをいふあり 宇拾十三 いろあさあをう青びをたるものどもあり

あをびる レルリ

春生ひ出る草をいふ 莫傳抄 松うとよ野べのあをうのあをふぐき林の玉の月ゆえてだゆ

あをふぐき

青葉の紫もてつくる暉をいふあり

あをふ〜ゑ

記上 天遊手矣於青紫埴打成而隱也

あをぶだひ 俗

形狀、大抵ぶだのゆるゝ、全體緑色、鱗ゆ黄赤の條あり、眼嘴共ゆ紅色大なる者ハ

二尺許ゆ至る

○鸚哥魚

あをぶち

淵の水色の青きをいふ 万六 虎ゆ乘り古屋を越て青淵ゆえびちとりこんつるぎ

たらるゞ 類名 碧潭アヲフチ

あをぶぢざる

とろ〜汁を鳥の肉ゆ被たるものあり

類聚往来 青淵汁

あをへど へど音 俗

あをを反吐あり あをを生の意 竹夫人納言これをきくそのたまふく船ゆのりてゐ握取の申ことを

ここを高き山とるたのめ、あどたのもしけあた
ことを申 せぞことあをへどをつきて

あをまめだらもゝ 俗

出名ゆだらもゝの
下ゆ注ゆ

あをまめ 俗 ○あをそゞ。あをゆぶ ○あをづる 青色の大豆あり

○緑大豆

あをまめがひ 俗

今類、形青豆の如きを以て名づく

あをまめごけ 俗

草名ゆめづたの下ゆ注ゆ

あをまめどうふ 俗

生豆粒を擂り豆腐の形ゆ作り凝めたるものあり

あをまめ 俗

燬及炙等の側ゆ盛り合せて形容を點綴菜蔬ちう

あをむの

體言

あをゝらづる カツラカヅラ

草の蔓出て青くそあるをいふあり 源抱朱 庭もやうゝあををのづるゆらをさゝえゆらう

あをゝろふる ヘカヅラカヅラ

顔いろ青ざめて氣力のよろるをいふあり 散木中 かたらひける人のうのごろいろあり

けるゆゑ色もあをゝあとろへ
たるいうど申けまぶ

あをかん 俗
朝鮮種を傳へ實青き時より食ふ堪さる
ものあり 柑類ゝ非ざるを橘あり ○緑橘

あをかほ ハヒフヘホ
顔色青くなりて氣ブンガワロキ 源 葉下 をいふなり
いろ〳〵あをくそこ
あをもを給へ

あをざむ マミムメモ
青黒色をいふあをく黒ざづくなり 字 龍 顋 可 志 年 父子相迎上 仙方のあを粉をわどこさせ
とるこのあをざむしをたる
いろをぶうつゞく

あをざら 枕詞
万七 青角髪よさその原ゝ ○青ざづくとい
勢 をいふ蓼葉子とるゝ青けれぶありかくて
俤 網 といふ地名ゝのひろけたるをいふなり

あをざゝ
深緑色をいふ 縫殿式 青 緑布一疋藍四圍
黄蘗二斤 拾玉三 せざうの春の柳のあを
ざゝ松ゝき庭の
けしきありけり

あをざる ヲリルレロ
ちの水ゝうにたるあをざゝ
たゞ移しるゝき世ありけり

あをざゝら 俗
上ゝおゝぐ

あをざゝのづき
六月の異名あり 夫九 おう孫させ青ざゝ月の
日をいふを扇の手風ぬるくもあるうちゝ
へぶ

あをざる ラリルレロ
まだりぬ 家長日記 びふるんよう
玉葉 弥生のせをつゝさ捐のあ

あをざる ラリルレロ
石類、ろういの
下ゝ注せ
顔色の青くありて肉の痩るをいふ 源 浮舟 例
あゝせらる〳〵あをゝやせ給へるとおどろ〳〵給ふ
木草の葉の青くあるをいふ 和泉式部集 春
雨の日をふるゝ〳〵我宿の垣根の草ゝあをゝ
赤むのどのわとおゝぐ〳〵青くあるを云ふ
源 葉下 あをゝおとろへ給へる 夫廿六 日を

へろ〳〵ぐもの〳〵澤のまこも草あをめが春の駒そのをゐる又廿八春の池ゐ
ひとへこかまてるう生氷あをむ玉りゝゝゝうさざゝけり

あをむく　カキクケ
あをむうまる　セシスセゾ
あをむうる〳〵　レルルレレ

自ら上をむくを
いふなり
他をして[アヲムカセル]を
いふなり
我があのづゝ[アヲムカレル]を
いふなり

あをむる　ケクルレケル
[アヲムカセル]をいふなり[大草相傳書]右の手を
うつむけて左の手をあをむけて
茉葉ゐ生ずる緑色の小き蠟なり
後羽化して白蝶となる和蝗蚸和名阿
ゝきもちひの
下ゐ注ゝセ

あをむゝきれ
あをむゝきれゐ
ゐりくろよう

青きをおびたる紫色あり[梁若水]あんぐんを
そまびみをゝとあをやうゐるゐらちれぐゝその

あをもの

青物の義菜蔬の総名
茉蔬をうり行く人をいふ

あをもゝぢ

重の色目なり[物装]表萌黄裏黄或面青、裏朽葉[逍装][胡曹][雁衣]表青、裏朽葉

[野槌服飾抄]面青、裏赤

あをもみぢ

紅葉もべき木のゝまだ青きをいふ[春雨抄]
あをもゝぢゐげりあゝふ青きもゝぢの下

あをやぎ

あをき青あり[類名]碧カニヤ
青楽カヤ[源タ負]きうりけさう物ゐいゝとあを
[和泉式部日記]ゐひちのうへの
やうゐるうゞゝのこちよびふをひ
草のあをやうゐるエゐ人ゐめゝ
ゝめぬをあをれようむるゐゝゐ

あをやぎ。あをやぐき

柳の色の青き故ゐいふ[万五]うめの花さゝ
たるをの〳〵阿平夜疑遠ろゝふゐろゝあをび
ようろうる春ゝもぞ

あをやぎ

あをやぎさう 俗

あをやぎの 枕詞

絲ゟ見ゐ〳〵その人をぞやうて
柳のいとのひうけう

あをやなぎ

あをやま

けふ恒ゟ見まてこゐめつ
らゝ〳〵つゞさこ

あをやぶき

あをやまで つまをゐ

重色目なり 藻ロ傳抄面
濃青裏同、

木名、青柳ゟ同ド 万五 阿乎夜奈義梅ともの
花を折らゞ〳〵飲ての後ゐちりぬとこゐよう〳〵

山の青くこゐるをいふ記上 其滋賊者青山
如枯山滋枯 万三 青山のこゐ朝ゟ雲

重色目あり 胡曹面青、裏黄 女房四季衣服ゟ
もて裏きあり 二條家衣服 あをもて青くこゐ〳〵紫
銅をいもでたる菜蔬其色青〳〵
類聚往来 青茄

あをよろぎ 俗

草名、かそうよろぎの
下ゟ注ゟ

あをとりのか 俗

烏賊の一種、濶大ゐ〳〵て狀障泥の如き
もの肉軟すゝて味美あり ○花枝

あをね

草名、あをねの條ゟ注ゟ青黛の
義あり 字鏡集 莞ヰヲ

語彙巻五

編輯權助木村正辭
權少外史横山由清 總裁

岡本保孝
神祇大録 小中村清矩
榊原芳野 共撰
黒河真頼
間宮永好
塙忠韶

物産諸品校正
編輯權助伊藤清民
編輯權助田中芳男

定價金壹拾錢壹